
白雪姫と一緒

ものもらい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白雪姫と一緒

【Nコード】

N7319X

【作者名】

ものもらい

【あらすじ】

黒檀の髪、雪のように白い肌、そして薔薇色の頬。彼女の名前は「白雪」。アップルパイで死んだ女の子。

硝子の棺の中で目覚めた彼女は、童話をなぞる奇妙な世界で、王子様ではなくて不思議な狼と一緒に旅に出る

「彼」の元に帰る為に。

この世界の名前は「空棺墓場」。頭がぶっ飛んでる奴らが住む世界。

1・毒林檎ならぬ毒アップルパイ

白雪、とのんびりとした声が、大きな手と一緒に差し出された。

彼の名前は叶^カ碧^{ヘキ}。

昔の事故で、額から眉間を通して右目の下までの大きな傷がある。

…あまりにも目立つので、それを隠そうとして前髪が少し長い

パツと見、暗くて怖い人。

ドイツの血を引いてるらしくて瞳は緑。傷を除いて、特に目立たない顔には印象的な瞳だ。

…あと身体が細身というよりは肉付きがよくて、背も高い。よくラグビーとか柔道部から誘われてるけど、中学からずっと帰宅部でいる。

2

そんな碧とは幼馴染。

病気がちの私と、自宅療養していた頃に窓越しで出会ってから今まで、それなりに喧嘩しつつ一緒に過ごしてきた。

今でもまだ少し身体が弱い私は勿論のこと帰宅部なので、特に用の無い私達は、よく二人でぶらぶらと街を歩いたり、お互いの家で適当に過ごしたりする。

そのせいか「付き合ってる」なんて噂されたり聞かれたりする。まあ否定しても冗談で肯定しても、私はよく知らない人に告白されるのだけだ。最低な人なんて碧が隣にいるのに迫ってきたりした。

…そう、自分で言うのもあれだが、私はとても美人に育ったと思う。

黒檀の髪、雪のように白い肌、薔薇色の頬。母にも父にも似て無いこの美しさに、何度か血が繋がって無いんじゃないかと思ったけど、ちゃんと私の親は彼らだった。

こんな訳で、お得な顔のおかげで私は周囲からちやほやされたものだけど、碧は顔の傷のことを昔からよく苛められた。

しかもどちらかという普通の顔立ちなものだから、よく私達二人は「つりあわない」と言われ続け　　碧も、そのことについて はまるで刷り込みのように決めつけている。

私と居る事で余計に容姿に関して引け目を感じている碧。私は容姿なんて関係なく彼を好ましく思う。…病気で、誰とも友達が出来ない時に出会ったのもあるかもしれないけれど。

とにかく。そんなものだから、碧から何か誘ってくる事は少ない。いつも私が強引に振り回しているのに、今回は珍しく碧から。滅多にないことだから私が断る道理なんてどこにもない訳で。

私はわくわくしながらその手をとった　　というのも、私が階段先で転がり落ちた事件を先週やらかしたばかりだからだ。

大した怪我は無くすんだけれど、碧はその日から階段先ではこうして「支えようか？」と腕を差し出してくれるという訳。なんて紳士。

「ねえ、今日は何処行くの？」

「あー…お母さんがさ、昨日新しく出来た店のケーキ買って来てくれてね。すごく美味しかったものだから…段差、気を付けて」

最後の一段を降りて、碧はそつと手を離す。

長めの前髪が風に煽られるのを横目に、私はこの穏やかな時間につそり微笑んだ。

*

「美味しかった！」

からんからんと鳴らして、私は秋の寒い空の下に飛び出した。

碧ものんびりと店から出たのを狙って、その腕を攫うようにとって「遠回りしよう」と駆けだす。……背後で「食後に走るのは…」と泣き言を言い始める声が聞こえたが無視した。

しばらくして閑静な通りに入り、流石に息が切れたので歩き始めると、小さな店がぼつんとあった。

「本屋だね」

碧が古本屋の、と付け加えた時には本屋の中まで見えた。中は洋装で、本の量が多すぎて店主の姿は見えない。

「ここまで量があれば面白いのが一つ二つあるかもね」と碧が興味深そうな顔で言うものだから、暇潰しに本屋に入る事を決めた。

ちりん、とベルを鳴らし、おそろおそろ、碧の背中を押して隠れるように入る。

どうやら綺麗なのは手前だけで、奥を覗くとだいぶ汚い。本に対する敬愛を感じられない積み重ね方をされた山が何個かあった。

「…店主はきつと厳つい妖精みたいなおじさんかな」

「ドワーフってこと?」

「そう。それか子泣き爺」

「……」

私の予想に、碧が何歩か下がる。その時に足下にあった本を蹴飛ばしてしまった。

「あ、やばっ」

拾い上げ、埃を払う。

深い緑色のその本は色々な所が擦り切れていて、端に「三百円」と貼られていてなんだか間抜けだ。

それなりに質の良かっただろう分厚い本の、床に置かれ蹴飛ばされ、安値を付けられる末路を思うと物悲しいというか…。

碧は壊れないよう、丁寧な手つきでその本を開く　　とすぐに閉じて背表紙を見て首を傾げた。

「タイトルが無い…？」

「しかも中は英語だね」

もつと言つと読めない。(二人揃って英語なんて嫌いな教材だからかもしれないけど)

所々「Princess」だの「Witch」だの「Castle」とあるし、極めつけに「Snow White」とかもあるから、きつと童話か何かだ。

何故「童話か何か」というと、

「…」「KILLL」多すぎじゃない？」「

何これ。大人向けって奴？

いや、でも大人向けの童話で色っぽい感じならまあ…最近よく見かけるけど。でも殺すって？

「私の名前がある本にここまで物騒な言葉があると…」

「白雪姫、御機嫌が悪いようなら閉じるよ?」

「リボンで首絞められたいようね、……まあ、どーせ中身分かんないし…他に話はないの?シンデレラとか」

「シンデレラ…えーっと灰かぶり…ヘンゼルとグレーテル位しか分かんないな」

ほら、と目次を開いた本を手渡される。

私は碧よりはほんの少し出来るくらいだけど…ああもう、読めない。

そう臍を曲げかけた時、なにやら本にかなり薄い栞が挟まれているのに気付いた。

気になって栞が差し込まれたページまでめくる。

現れたのは赤いリボン、少し薄汚れた紙にお姫様と王子様の描かれた栞。意外にも綺麗で、もっとよく見ようと栞を手を取って

「痛いっ」

「白雪!?!」

手渡してきた時点で碧はもう違う本を見ていたから、私のこの悲鳴にたいそう驚いた顔をしていた。
でも何てことはない。紙で切っただけ　　にしては出血量が多い
気もするけれど、すぐに消える傷だ。

碧はポケットからハンカチと絆創膏を出した。

私が断るのを待たずに血を拭きとり絆創膏を貼る。まったく用意の良い彼にお礼を言つて本の方を見遣れば　　棊にもそのページにも血が少し飛び散っている。

たった三百円だし買い取るか、と弁償の為に奥のレジ（がきつとある筈）に向かおうと一歩踏み出すと、碧が待つて、と本を取り上げた。

「僕が付き合わせて怪我させちゃったんだから、僕が払うよ」
「でも…あつ」

取り返そうと手を伸ばすと、碧はその無駄に高い身長を活かして私の手の届かない所まで持つていき、その肩に乗せてさっさと
流星にそこまで気取れなかったのか　　ではなく恐る恐る先へ進んだ。

レジにいた店主は予想を裏切らず爺さんだった。
ドワーフでも子泣き爺でもなく、ただの背の小さな好々爺。でっかい碧が買いに来た時はびっくりして椅子から転がり落ちて、碧が泣きそうな顔をしてしまった。

そのまま三百円を払い、色々迷惑をかけた埃っぽい店を出て、私達は今度こそ家路につく。

でもまあ、せっかく買ったのだから辞書でも引いてお勉強代わりに読まないか、という事で私の家に向かった。

「おかえりなさい」

手弱女の雰囲気を持つ母が出迎え、「おやつにアップルパイを持っていくわね」と微笑む。

「昨日、親戚から林檎を山ほど貰ってから食事には絶対一品林檎が出てくる。きっとその林檎で（母はお菓子作りが好きだ）作ったのだろう。」

甘いもの好きな私は「さつきケーキ食って来た」なんて言わずに元気に間延びした返事をした。

部屋に入る時に「太るよ？」と笑われたけど気にしない。その分私は朝と夕にジョギングとかしてるし、元々太りにくい質だからこれぐらい…大丈夫…うん。

「
どうぞ」

どうにも女の子らしい甘やかな部屋というよりは清潔感を重視した私の部屋。女の子が苦手の碧でも抵抗感がないくらいの爽やかさだ。

「えーっと、辞書、辞書っと…」

碧がクッションに座り、本をテーブルに出してる間に、私は踏み台昇降に使ってた辞書を引っ張り出す。

碧に手渡そうと振り返ると、丁度母が扉をノックした。

「あ、今開けます」

碧がそれに応じて扉を開けると、母は紅茶とアップルパイをそそくさと置いて行き、にっこり「味わって食べてね！」と笑った。

……今回のアップルパイはそんなに自信作なのだろうか。

碧が「ありがとうございます」と言い切る前に母は部屋から出て行き、私は踏みつけられた辞書を碧に手渡した。

「……ねえ白雪、この辞書…何かへしゃげて」

「ないわ。最初の頃からそうだったわ」

「いや、でも ……まあいいか」

とりあえずパイを食べようと二人で仲良く手を合わせ、「いただきまーす」のいの字を言いかけた時、階下から電話のベルが鳴った。

母がすぐにすっ飛んで数秒、「碧くん、お電話よー？」との声が。何で碧が此処にいるって分かったんだろ…碧のお母さんからとか？

「…あ、先食べてて」

「ん、分かった」

碧がトントンと階段を下り、母にすいません、と声をかけるのをうつすら聞きながら、私はアップルパイを一口口に突っ込んで紅茶を飲んだ。

ぺらぺらと謎の本を捲り、またもう一口口に突っ込むと、喉が咽た。

…なんかパサパサしてるしなあ…。

紅茶を飲んで落ち着こうと手を伸ばす

紅茶。 …あれ、紅茶

……あれ？

紅茶が、二つ …… ああ、視界がぼやけてるのか。
手が異様に震えてるのは、痙攣…？どうしよう、私は林檎アレルギー
だったの？「白雪」だから？いや、ふざけてる場合じゃない。
…
なんだか寒いよ。…… 碧、碧は。お母さん

「
げほっ！！！」

やだ、真っ赤。真っ赤だよ。

このクツション、お父さんがプレゼントしてくれたのに。

私、今まで病弱だったけど血を吐きだした、こと、なんて、ないよ。

… 碧。まだ、電話終わらないの？アレルギーだけで血を吐くものなの？

ハハツ、毒林檎じゃなくてアップルパイで死んじゃう
「白雪」姫だなんて。…… なんて、間抜けなの。

私は自然と落ちる瞼に、逆らえなかった。

*

……花の、匂いがする。
しくしく、しくしくと嘆く声も、聞こえる。

やっぱり瞼は重たくて、息の詰まるこの花の匂いに縛られたように
私は動けなかった。

「？」

涼やかな声。男の声だ。彼が何かを言って、泣いている声は（何人
かいるようだ）ぼそぼそと返す。
きい、と音をたて、息苦しい花の匂いは胡散した。かわりに木の匂
い、葉っぱの青臭い香りが入って来た。

「……白雪、姫」

そつと頬に絹の 手袋を付けた指先が触れ、美しい手の持ち主
である事が分かった。頬を這うその指は、ピアノでもやってるのか、
無駄に細くて長い指だ。

ああ、頬に髪が、唇に息が降りかかる ……息？

ぱっと目を開けた。

やたら重い瞼を、無理やりこじ開けた。

「……………!?!」

すると映ったのは白い肌に輝く金髪、抜いてやりたくなくなる睫毛、すっと通った鼻、薄い唇。

そう、イケメンが、イケメンが私のファーストキスを奪わんと唇を近づけていたのだ!

「!」 来ないでえ!!

叫んで、私はビンタでも身体を押しつけるでもなく、細いその首に一発入れた。

*

(アップルパイで死んだ白雪姫の誕生です)

2・追いかけてくる花盗人

綺麗に入ったそれは、過去のトラウマのせいで上手く力が入らなかつたらしい。

過去のトラウマ　　私は昔、ロリコンの変態野郎に下校帰りに追いかけて回されたことがある。

最初、その人はイケメンというよりはちょっとばっかし顔が良い感じで、子供の想像する変質者とは違ったものだから、私は　何分その頃は世間知らずなのもあって、蹲っていたその人に声をかけた。

するとお分かりの通り、その変態野郎は近寄って首を傾げる私に牙を剥いた。

声も出ずに腕を掴まれた私。変態野郎の手が私の服に手をかけたかようにその時、用事で私より少し遅く帰った碧が、その男に後ろから体当たりをかまして私の手をとって逃げだしたのだ。

気弱な彼の勇敢な一面にキュンときたのも僅かな事で、顔を擦り向けた変態野郎は激怒し、果物ナイフを手に追いかけて来た。

子供と大人。どうにも自分たちの分は悪い。

結局私達は追いつかれ、私目掛けてナイフを振り下ろし

刺されたのは碧だった。

一生分の勇敢、いや蛮勇を振り絞った彼は、最初に体当たりした時に逃げるのに邪魔な鞆はそこらに投げ捨てた。だからナイフは彼の肩に。勢いを殺せず背中に。その後彼の絶叫が聞こえた筈なのに、私は覚えていない。唯、赤く染まる彼だけを、暴力を振りかざした男では無く、碧だけを呆然と見つめていた。

彼の絶叫は近くの大人に聞こえ、気が付けば男は大柄なおじさん達に抑えられ、碧は散歩中のおじいさんに救急車を呼んで貰っていた。

慌ただしい中、私は婦警さんに連れられてぼんやりとしていた。父と母が来ても、ずっとだ。

心臓が痛い。ああ、碧はもつと痛かっただろくに、あの子はどうなったの？

それしか考えられずに、気づけば病室にいた。碧が包帯を巻いて、青白い顔でベッドで寝ていた。

私に気付いて、ごめんね、足擦りむいちゃった？なんて言うものだから、私はぶつつんと何かがキレた。飾られてたアンパ マンのぬいぐるみを全力投球した。

どうして私の事ばかり、何で庇ったの、馬鹿、痛がりの癖に、弱虫の癖に私の心配ばかり、ああもう、馬鹿、馬鹿、碧の馬鹿！

隣の病室に響くほどの声だったと、後にその病室の婆さんから聞いた。

碧は私が泣いてるのにつられたのか、張りつめた糸が切れたのか、はたまた私の声が怖かったのか、急にワンワン泣き出した。隣室の婆さんはそれをネタに小説を練り始めたらしい。

だって、白雪は綺麗だから。

自分は男だし、とうに傷がある。だから怪我をして、それが残っても構わない。でも白雪は駄目なんだ。白雪だから。

泣いていてよく聞こえなかったけれど、碧はそう言った。

私はいつものごとく自分の価値を下げ、卑下する碧が許せなくて、二発目にバイキ マンをぶん投げた。

とまあ、そんな過去のトラウマ。

アレ以来、私は男が苦手だ。嫌いだ。一時嫌い過ぎてレスになろうかと考えた事もある。

でも碧は一緒にいても不快じゃない。怖くない。傍にいて、安心できた。

ああけれど、今、碧は、碧が、いない。

「うう…」

きらきらの男が呻いて起き上がる。

すっと顔を上げる前に、私は転がるように逃げた。途中、やけに小さい動物が道を塞いだが、私は間に合わずに蹴り飛ばしてしまった。悲鳴が聞こえる。

走って、走って、身体に付いた花がひらひらと飛ぶ。後ろから追いかける足音が聞こえる。

「ま　　　　　待て！」

その声に、足はそのままに振り返る。男は邪魔な蔓を大きなナイフ
いや、剣で斬り落としていた。

(ナイフ…違う、剣、剣が、あの時みたいに、碧…っ)

不意に森を抜ける。河原に出て、私は石に躓いてこけた。

「ひっ」

男は私が逃げられない事を悟って走るのをやめ、大股で、ゆっくりと
傲慢さを見え隠れしながら、私に近寄る。途中で、剣を
落とした。

「白雪姫、どうしたの？君の王子様だ。君にふさわしい
白雪姫」

「こ、来ないで！」

勝手に王子を名乗りやがって。選択肢は与えないとでも？これだからイケメンも男も嫌いなものよ！色に目が眩んで否定されるのを知らない……あ、女もだったわね。

一瞬自分を取り戻しかけたけど、急に眼の前に大きな、でも繊細な手がひよっこり現れた。思わず体を後ろに退けてしまう。

「白雪姫、こっちにおいで。手を擦りむいているよ」

「や、やっ！来ないでよ 気持ち悪いっ 気持ち悪い！」

差し出した腕を払いのける。

トラウマを思い出している興奮と、得体の知れない嫌悪感を、この男

から感じる。

「
…」

「痛ッ」

男は拒絶した腕を力の限り掴んで、優しげな顔をやめて危機迫ったような、とにかく恐ろしい顔で怒鳴った。

「何故っ、何がっ、
どうして駄目なんだ！」

「ぜ、全部よ！触らないで！こなっ…あ？」

不意に、赤が、散った。

私も、男も、呆然としている。

気付けば、凶器は私の手の中。よく河原にある、手ごろな、先端の尖った、石。

これで、本能的に、無意識に身を守る物を探した、私は。

毛嫌いし、今なお深い心の傷を作り、私から碧を奪うのでは無いかと恐れたあの変態野郎と同じ事を、私は、この綺麗な男に、白馬の王子様に。

サア、と血の気が引く。手は生々しい感覚を覚えている。

……思えば、彼は私にキスをしようとしたけれど、それだけで。剣も蔓を払う為で、それだって私が怯えているのを見て捨ててくれたんじゃないの？

それでも拒絶する私に流石に怒って、腕を掴んで、怒鳴ってそれだけ。暴力も何も振るってない。追いかけて来た、だけ。

「……」

王子が垂れる血に、裂けた傷に触れる。奇しくも碧と同じ傷だ。碧が虐められ、自分を卑下する原因を、許せない私が、まったく知らぬ無害な人に付けた。

「しら、ゆき」

姫、と最後まで続かなかった。王子はぼったり倒れてしまった。

「ね、ねえ、王子様……」

首に手を当てる。生きてる。

ほっと息を吐いたのも束の間、「殿下あ　！」と呼ぶ声が聞こえた。

王子の従者達だ。…彼らが仕える主を殴り、傷物にした私。どうなるかなんて、馬鹿でも分かる。

「……………」

私は王子様の落とした剣を引っ掴む。重い筈のそれは、何故か軽々と持ち上げられた。

…そういえば、逃げる時も大して息は切れなかった気がする。

まあ、どうでもいい。こんなよく分からない状態なのだもの、きつと脳か何かが身を守る為に普段以上の力を出させてるとか、きつとそんなのだ。

私はハンカチを川の水に浸し、王子の血を拭きとる。苦しくないように首元を開け　逃げた。これ以上あの場に居たら、彼の従者に殺される。

謝っても許されないけど、このなんちゃって介抱は私なりの、即席の謝罪だ。

ごめんなさい。本当にごめんなさい。私は碧以外に初めて、泣きながら本心から謝った。

*

(花盗人を傷つける、綺麗なお花)

3・私は、

時は夕暮れ。

私は大きな木の下で、剣を引きずりながら、うろついていた
そう、迷っていた。

「川下に行けば…人が住んでる、筈…なのよね？」

違ったかもしれない。

とにかく王子様から離れようと、適当に逃げた私は、うろつるおる
おるとして彷徨いながら陽が傾けば傾くほどに怖くて泣きそうにな
る。

そもそも、此処は何なの？

私が住んでいた街に、こんな山はない。森も無い。雑木林だっとな
い。

しかも私が入られていたあれは、今思えば棺桶じゃないの…？

「白雪姫…」

王子は私を白雪姫と呼んだ。ふざけて「姫」を付けられた事はある
けれど、彼のそれは違うものがあった。

「白雪姫」と呼ばれ、棺の中で仮初の眠りに落ち、美しい王子にキスされ

そんな顛末を迎えるのは童話の中でただ一つ。

『Snow White』こと白雪姫、だ。

私　私は、数時間前に英語で書かれた本を買った。童話の本だった。一緒に解読しようねって碧と家に帰って……母がおやつのアップルパイを持って来た。碧宛ての電話に彼が席を立て、私が先にアップルパイに口を付けた。私は血を吐き……、

「気付けば柩の中。…じゃあやっぱり、私、最初は違うけど、途中から『白雪姫』のオチを迎えかけたってこと？」

夢でも、ドッキリでもない。

この剣は確かに斬れるし重い。王子は私に殴られ大きな傷を負った。ドッキリか現実なら彼は銃刀法違反で捕まり、救急車を呼ばれ、私は警察行きの筈だ。

けれど、私は今豚箱の中ではなく、暗い森の中を彷徨っている。車の音も、街の喧騒も聞こえない。明りも見えない。

「此処は…何処なの…？」

ずるずると木に背を預けて座り込む。制服が痛んだらうけど気にするものか。

「……………」

私は剣を少しだけ抜いた。抜き身の刃は、美しい冴えた光で私を見た。

「…綺麗」

眠いから、疲れたから、きつとそう思うのだ。

*

「ひ、姫様！しら、白雪姫様！」
「ん、う…？」

赤い火が私を照らす。どもった声は残念ながら碧のものではなかった。

「白雪つ姫様！お迎えにあがりました！お迎えに！」

お迎え。帰れる…？

私の目はすぐに冴えた。

目の前には座り込んだ私よりは少し大きい小人が二人、一人は松明、一人は丸腰で顔を赤くして私に呼びかけていた。

「あの王子様はもうお帰りになされました。姫様、こんな所に居ては、魔女が貴方様を殺しに、殺しに！」

「魔女…？」

よく分からない彼ら。白雪姫に準えているのならば、この背丈的に「七人の小人」だろうか。

魔女は継母。自分よりも美しい白雪姫に嫉妬し、その座を奪う為に殺そうと、絞殺とか毒殺を仕掛けてくる女。

そう思うと、私は私を娶り、継母に復讐する場を設けてくれる「味方」を「敵」にしてしまった訳だ。恐ろしい魔女に国家権力を持つ王子を！

「…んな、そんな…そんな訳、無いでしょう!？」

立ち上がり、鞘に入った剣を背中を預けていた木に叩きつける。二人の小人はびくつと後ずさった。

「ここは！此処は日本よ！それなりに裕福な家です碧と、碧と一緒に、本を読んでっ この森は何なのよ！私は遂にトチ狂った訳え！？怖くて王子に殴りかかって、森を彷徨って ……きつと夢よ！これは、これはっ」

「ひ、姫っ様、お、おおお気を、お鎮め下さいっ」

「私は姫じゃない！『白雪』よ！ヒツギ枢 シラユキ白雪！私はっ私を白雪姫と、呼ば

「ぶす、と首に何かが刺さる。

すぐに視界が霞み、剣を強く握って、私は崩れ落ちた。もう一度重い瞼を開いても、小人はもう見えない。でも、怖くなかった。

…今度はきつと、私の部屋で目が覚める。きつと、碧が心配そうな顔で覗いている。

その手を握って、怖い夢を見たんだよ、と慰めてもらおう。

始まりだって世界が霞んだのだから、きつと悪夢の終わりもそうなのだ。

「へ、碧…？」

粗末な部屋だった。
ベッドだって寝心地は最悪。身体はだるい。碧、碧。此処は何処なの…？

「み、皆っ姫様が目覚めたぞ！」

嘘。

喜びの聲が迫ってくる。小さな人が、手にパンや飲み物、シチューのようなものを掲げて押し寄せてくる。…ああ、もう…何なの、

「ここは、どこなの…？」

掠れた呟きに、誰かが「我らの家です！」と叫ぶ。

彼らは、例え私が口汚い言葉を吐いても熱狂しそうな 盲目の信者のように、私を見上げた。

「じゃ、じゃあ、此処は…日本、よね？」

「ニホン？いいえ、此処は『カラヒツギハカバ空棺墓場』です！」

「此処は空棺墓場の東の東の右下、その端の、小さな森の、小汚い小屋です！」

「此処は

」

ばかり。

私は考えるのを放棄した。そのまま気を失う事も出来ず、故郷を走馬灯のように思っ
て 涙した。

*

(疑いたくても、疑う事の出来ない白雪姫と盲信の小人たち)

4・殺された私の小人

あれから私は、いずれ訪れる復讐に怯えながら、盲信する小人を利用するようにこの家に住んだ。

……何て事のない生活だった。

何もせず暮らして欲しいと言われたけれど、流石にそれは居心地が悪い。私は小人が居ない間、家を掃除し、適当に料理を作った。

例え私が鶏肉に砂糖を振って焼いたものを出しても、彼らは涙を流して食べるのだろう。

…熱過ぎて焼けそうな、私への忠義というか、信仰心は、時折こちらが胸焼けしてしまいそうだ。

現に、最初、逃げだす際に蹴飛ばした小人のペティなんて名誉の負傷ですと言わんばかりの態度だし、キレた私に怯えた二人は、むしろ怖がらせてしまったとか言っただけで非を詫び、吹き矢で私を眠らせたルーニーは床に頭を付けて詫びて来た。

彼らは私に何もせず優雅に暮らせと言い、汚れた制服の代わりに可愛い服を買い与えてくれたけれど、どうしても私は制服が手放せなかった。この世界を、現実を認めなくなかったからかもしれない。

そんな私に甘い彼らだが、外にだけは絶対出るなときつく言われた。理由は勿論、「白雪姫」の通りである。

だから洗濯は小人がやるし、皿を洗おうとすると小人が「手が荒れてしまいます！」とやらせてくれないので、今はとても暇。

こうなるといつもベッドに転がり、ポケットに入っていたケータイを取り出すのが日課だ。

……まあ、当然ながら圏外な訳だけど、最初の頃はそれでも狂ったように家に、碧に電話をかけた。

けれど一度だけ。たった一度だけ、繋がった事がある。

『 おかけになった電話番号は

』

懐かしさと、やっぱりなという諦め。

此处で暮らして二日目に繋がったのは自宅の電話だ。

なのにその電話番号がないなんて言われた日には、此处が日本でもヨーロッパでもなく、『カラヒツキハカバ空棺墓場』とかいう世界なのだという証拠だろつ。

きつと『墓場』というだけに、此処は死後の世界。

この美しさで色んな人に、妬みに僻みに色んな感情を焚き付けた私への、その罪を罰する為の世界なのだ。

(……………それなら、罰は何なのだろう)

結局、この世界でも私は美しい。黒檀の髪、雪のように白い肌。薔薇色の頬。向こうでも変わらない私の姿。向こうと変わらない私への好意。

もう向こうには帰れない事？

でも人間は諦めて慣れてしまう生き物だし、今は辛くともいつかはその辛さも消えてしまう。

では復讐を遂げようとする魔女に、王子様に殺されることだろうか？
…殺されたら、私は本当の眠りにつけるの？それとも帰れるの…？

『死』を考えるのは恐ろしい。

一度だけ、小人のいないうちに包丁を手首に当てたが、途中でやめてしまった。

怖いのと、希望を　　碧に再会できるかもしれない希望を、自分の手で潰したくなかったからかもしれない。

ちくり、と痛みがきた瞬間　　生きたいと、そう思ってしまった。

「…もう、電池が無くなっちゃっ」

び、と最後に録音したあの日の言葉を流す。

耳に雑音混じりに流れる彼の声に、目が痛くなった。

*

その夜、賑やかな食事を終え、ぼけーっとしていた時のこと。

私に背を向け仕事道具を拭いていたペニーが急に立ち上がって、仕事道具が一つないとぼやいた。

いつも仕事場所はころころと変わるらしく、明日は遠い所での仕事だから今のうちに取りに行くという。

ペティが自分も付いて行くといい、松明に火を付けて二人で暗い夜道に消えて行った。

…一時間ほど経っても帰らない二人に、他の小人が
そわそわし始める。私は嫌な予感がして、一応の保険に王子から奪
った剣を引つ張り出した。

「ねえ、迎えに行かない？」

私の一声に、小人は「なんとお優しい！」「なんと勇敢な！」と私
を褒め称えた後、口をそろえて駄目だと言われた。…：最初の褒め
文句は何だったのよ。

ルーニーと後一人、どもりっぱなしの小人がナイフや斧を持って見
に行く事になり、残った私達は念の為武器を取り、一人は窓を少し
開けて外を監視し、一人は玄関の前に、もう一人は私を奥の部屋に
押し込んで、その扉の前に陣取った。

扉を叩いても駄目ですしか言わないので、私は空き部屋（ちなみに
此処は一階）の薄い壁に恐る恐る背中を預ける。

隙間風に震えて、何度か剣を鞘から抜いた。

その、抜き身の刃を見ると心が落ち着く私は、だいぶキテるのかも
しれない。

「キッ」

不意に、遠く、居間からそんな声がした。

数秒後には、どす、という音が届き、私は背筋が凍る。

来たのだ。

王子か、魔女か。それでもない誰かかもしれない。とにかく、私を殺す者が来たのだ。

思わず剣を握りしめる。「うわああああ!!」と扉の近くから絶叫のような声がして、肉を斬る音と、冷たい嘲笑が扉の前から届いた。

(…碧、どうしよう…碧、)

ごくり、と唾を飲み込み、立ち上がって剣を構えた。

「小人の分際で、騎士気取りかえ？」

女の声だ。つまり……魔女だ。多分。

がちやり、と扉が開く前に、私は渾身の力で剣を、薄い壁に叩きつけた。

*

「ペ、ペニー？ペティ、ルーニー？」

遠回りをして、彼らが向かっただろう足跡を見つけ、ただ走った。追いかける気配は、今の所は無い。

「誰か…！返事してよ…！」

そこで私は、拓けた場所に出る。

彼らの足では遠くでも、私にしてみればそうでもない。そんな場所で、彼らは仕事をし、私に服を与え、食事を与え、のんびりした生活を与え

その、結果が、

「ひッ

！」

何これ何これ何これ……！この森は野犬でもいるの？魔女が、魔女が手を下したらこうなるの？

こんな、踏まれた蝉みたいな、車に轢かれて内臓ぶちまけたような体半分無くなってしまうような、そんな死に方してしまうの？それだけの事を彼らはしたの

！？

軽蔑されるかもしれないけれど、私は彼らを探して後悔した。凄く後悔した。

視界はぼやけ、さっき食べて消化中だろう胃の中のものが逆流しそうだし、くらくらして手の感覚が無くなってくる。

「……………鬼ごっこは、終わり？」

耳元で、冷たい声がする。

私は問答無用で肘鉄を左肩の上、女の顔があるだろう場所に放つ。

惨い遺体を見ての怒りでは無い。怒りは湧かなかった。いや、怒りを越えて、犯人のその危険性に本能的に怯えて、生きる為にただ相手を排除しようとしたか思わなかった。

「妾に体術かえ？なんと愚かな事か…白雪」

フードで顔は見えないが、にやりと唇が弧の形を描いたのだけは、はっきり見えた。

*

（死んだ下僕と、因縁の親子対決）

5・来たるは騎士ではなく狼

「き、気安く呼ばないで！」

「ほほ、子猫のように威嚇せずともよろしい。白雪や、こちらにおいで」

きつと、このサイコパスみたいな女からしたら、本当に子猫の大騒ぎぐらいにしか感じないのだろう。

一步、優雅に踏み出した魔女に対し、私は引かずに、王子様の剣を鞘から抜いて切っ先を喉元ぎりぎりに突き刺した。

「…子猫ではなく、子供の虎だったか。剣を振り回すなど…それでも姫かえ？」

「私は姫じゃない。枢^{ヒツキ}白雪^{シラユキ}よ！舐めてかかると痛い目見るわよ、気をつけなさいっ」

「ふふ、知っておるとも…白雪、お前はこの墓場の人間ではない。『栞』によってこちらに招かれただけなのだ」

嘘か本当か分からぬ情報に、思わず動揺して剣先が魔女の喉を掠る。

しかし魔女は気にせず微笑んで続けた。

「向こうの世界で、槩で指を切らなかつたか？血が付いてしまったらう？」

「……ええ」

「その時点でお前の運命は決まっていたのだよ、白雪い？あれはこの世界に行く片道切符。それを得たお前は本によって『Snow White』、白雪『姫』に選ばれたのさ！」

「……何を、言ってるの……？」

……つまり、槩で指を切った。あの時点で私は、全て決まっていた？

この世界に行く為の片道切符が槩で、本にお前は白雪姫な、って役を言い渡されて、小人たちは『姫』の私を大事に守ってくれて、死んで、今まさに私は魔女に殺されるわけ？

「『白雪姫』は魔女の手で殺されねば。目覚めをくれる王子は

ああ、来ないだろうなあ……？」

……王子。私を眠りから覚ます王子様。私が傷付けた、王子様。そんな女をどうして助けるだろう。あんなことされたら、どんなに美しくても百年の恋すらも冷めるだろうに。

切っ先が震える。それでも目は逸らさずに、魔女を睨みつけた。

「……そんな顔をするでないよ。大丈夫、この世界も向こうと同じ。

死んでしまえばそれで終わりだ。 さあ、こちらにおいで。お前に似合う腰紐を持って来たのだよ？」

すつと魔女がフードの下から綺麗な腰紐を取り出す。

私は無言で剣を下げ、鞘を持ち上げる。……魔女が厭らしく晒ったのが見えた

「 はあっ！」

「 くう！？ 」

大人しく鞘に仕舞う振りをして、私は剣で腰紐を斬りつける。魔女がそれに反応する前に、鞘をその横っ面に殴りつけた。

「 お…おのれえ…！」

「 ……いいこと、オバサン？お姫様はね、助けが来なければ泣いて諦める子ばかりじゃ…ないのよっ！」

言い捨て、私は凄惨な光景を背にして走り出す。

ぐちゃ、とか、べちゃ、とか音がしたが、申し訳ないけど心の中で謝るだけにした。

今はただ、見ないようにしっかり前を見据えて全力で森を走るしか

ない。

(…おかしい)

前までならすぐ息が切れて倒れるなりしただろうに、今では信じられないほどに身体が軽い。剣道部でもないのに剣が上手く使える。

(…これも、空棺墓場に来たから…?)

きっとそうだ。あんなイカれたようなのがいる世界だ、こんぐらいのオマケだってあってもいいだろう。

「……どこか…どこか…隠れられる場所…！」

とにかく、調べればまだまだ情報が出てきそうだ。この世界に行く片道切符があるのなら向こうに帰る片道切符だってあるのかもしれない。

最悪、人を殺したって私は彼の隣へ、優しい場所に帰る。…絶対、死んでたまるか。

「もう、いいかしらねえ？」

「えっ」

振り向く。

視界一杯に、女の顔がある。半分は美しい。もう半分は皺がよつていて、僻み、妬み、意地の悪さを全て凝縮して、体現したような顔だ。美しさと醜悪さが同居した顔。その中で、唇だけが綺麗な赤い弧だった。

「うっ…！」

どんつと凄まじい風に弾き飛ばされ、ゴロゴロと転がって木に当たる。

その際に、剣だけは後生大事に抱え込んだ。

「…もう、いいだろう？ 妾がこの時を何年待ったと思うのだ」

「はっ　　百年とか？ ば　　あっ…」

ババア、と口汚く吐き捨てるのを遮るように、喉を掴まれる。

「なんだい、その顔。情けない、美しくない、馬鹿のよう…！」

魔女の顔が歪む。細い腕にはぎりぎりど腕力が入り、足は遂に地から離れた。

「うつ…え…」

「白雪。お前はもう帰る事など出来ない。絶対に。ええ、絶対に！」

「…っ…」
「お前を殺し、妾はこの世で一番美しくなる。お前と言う影から解放されるのだ…！」
「……………！」

こいつ、本気で殺す気だ…！

ああでも、逃れようにも酸素が足りなくて目が霞む。涎が唇の端から一筋垂れ、涙が浮かんだ。手は痙攣したようでも上手く動かせない。

(…碧。私、ここで、おわりみたい…)

ああ、視界が黒く染まる。

もういつそ目を閉じてしまおうと、私は力を抜いた

がさがさがさがさ。
ざっがっ。

「何っ」

ごおっ、と風が吹く。

…もう、風なんて嫌いよ。

やさぐれ、どうでもいい気分の私は首の圧迫感が消えると同時に、
またも地面を転がっていた。

「貴様　　薄汚い犬め！」

呪うかのように魔女は叫ぶ。

私と言えば、喉に手を当てゴホゴホと咽っていた。絞められたせいで
呼吸が滅茶苦茶な事になっている。

なかなか収まらない咳に苛ついていると、フッと影が差した。

「……？」

涙目で見上げる。そこに居たのは　　黒い毛並みの犬だった。

綺麗とは言い難い。所々葉っぱや泥が付いているし、獣臭い。でも
目だけは綺麗だった。

そう、とても綺麗な　　緑。…今までずっと、この色を見ると、
優しい気持ちになれた。

「剣を」

「…え？」

「剣をとるんだ。魔女を殺さなきゃ、君は君の世界に帰れない」

「野良犬、外れ者つ。王子を気取って余計な事を言うでない！」

犬の言葉が一瞬よく分からなかったが、魔女の声で頭が急速に回った。

犬は素早く動いて魔女に噛みつく。何歩か下がらせた後、転がっていた剣を蹴って私に渡してきた。

「……帰れる…？」

鞘から剣を僅かに抜く。

刃の冷たい輝きが、頷いてくれたような気がするのはいっせいで、やっぱり私がだいぶキテルからだろう。 やっば

(…魔女は「余計な事を言うな」と言った…じゃあ、本当に)

魔女を倒せば、帰れる？

さっきは退いていた魔女が、段々とこちらに歩み寄る。

段々犬の分が悪くなったらしく、遂には数分前の私のようにゴロゴロと地面を転がって木に身体をぶつけてしまう。

「…白雪。お前にぴったりの王子様ではないか
負け犬とは
！」

ぶわっとな風がこちらに向かってくる。

でも、もう私は投げやりじゃない。風の軌道からはすでに逸れて、
魔女に渾身の　　というか、私の精神安定剤こと剣を全力で投
げた。

魔女からしたらさっきまでばけーっとしていた女が急にアクティブ
に動いたものだから、風を避けた時点で動きがしばし止まる。

しかし、それでも投げられた剣が魔女との距離が半分程になった頃、
魔女は剣を弾かんと腕を伸ばした。

ごきり、と剣がおかしい音をたてる。それでも気にしない。私はこ
ちらに攻撃しないうちに魔女に向かって走り出した。

「なんと野蛮、な　　!?」

魔女が前のめりに崩れる。後ろから、犬が体当たりをして噛みつい
ていた。

「」の　　「！」

何とか犬を振り払う頃には私は魔女から一歩半手前で止まり、その

まま崩れかけの身体に、そのおぞましい顔に、蹴りを一発お見舞いした。

蹴った威力を殺さずに、一回私はくるりと回る。そして、ふらつく魔法の頭を横から鞘でぶん殴った。

何かの惨殺事件でありそうな殺し方　　つまりこの魔法を撲殺せんと鞘を振り上げた瞬間、魔法は私をギツと睨みつける。

かなりの迫力だった。まるで世界の悪を見るかのような、暴君に刃向かうかのような目で、私を射抜く。

これまでかなりの同性に睨まれてきたが、さすがに此処までの憎しみは向けられた事が無い。…皆、暴言と一緒にいつてくるその目には、私への諦めと羨望が混じっていた。

ヒュン。

たじろいだ隙に、魔法は不利と見たのか姿を消した。

急に静かになった森に、今だ魔法が隠れてるような気がして身を固くする。鞘を握る指先が白くなるほどに。

それを見かねた犬が「魔法はもう城に帰ったよ」と断言するのに、私はやっと一息つけた。

*

(王子様でも騎士でもなく、狼さんが助けにきた)

6. つめんなさい

私はふらり、と幽鬼のように歩きだす。

それに慌てて付いて来た犬は、私の服の裾を噛んで恐る恐る尋ねてきた。

「 小人を。小人たちの遺体を。埋めてあげなきゃいけないわ」

「君は その、なんだ、まだ若い……女の子だし、僕がやろうか？」

「いいの。今まで……少しの間だけど、『私』を見ていなかったのかもしいないけれど、彼らは私を養ってくれて、守ってくれて死んだのだから」

剣は折れてしまっているけれど、鞘で土を掘るくらいは出来るだろう。

犬は私の返答を聞くと、黙って何処かに行ってしまった。

*

そのまま私は一人でよろよろと彼らの元に向かった訳なのだが、彼らの遺体は野犬や鴉が啄んでいって、出会いが私の蹴りだったペテイの頭だけが何とか残っていた。

「これが、食物連鎖ってヤツ？」

「…そうだね」

気配もなく後ろに居た犬にぞわつと鳥肌が立つ。

犬は白い布　　ベッドのシーツを啜えているようで、はらりと上手に広げると、ペティの髪を啜えた。

「何するの！？」と非難して取り返そうと腕を伸ばすも間に合わず、犬はシーツの上にコロんと頭を置いてシーツを被せる。

「死者の頭を素手で持つのも失礼だろう？」

「あ…そっか…そうね…ごめんなさい、怒鳴っちゃって…」

「いや…」

「私が持つわ。…お願い」

かなり躊躇ったあと、犬は包んだその頭を渡し、すたすたと先頭を切って歩き出した。

「何処に行くの？」
「彼らの家へ。他にもいるだろうし…我が家の近くで眠りたいだろうと思っただろ」

そうして、私は家の中で転がっていた「彼ら」を鞘で掘った穴の中へ埋葬した。

私が掘っている間に犬が全員をシートでくるんでくれたおかげで、私は彼らの血が付く事は無かった。

…始め嫌々だったのを思い出すと、犬は私が死体を運んで汚れるのが嫌だったのかもしれない。

埋め終えた後、私は惨殺の現場から離れた小人たちの作業用の小屋で一晩過ごすことにした。
犬は小屋の前でいいと断ったけれど、温もりが恋しくて無理やり連れ込んだ。

犬の腹に頭を預けられるくらいには、私は彼の獣臭さに慣れたようで、土で汚れた鞘の意匠をなぞりながら、眠りが訪れるのを待った。

ちなみに、突然沸いてくる涙は彼の腹に顔を埋める事でなんとか押し止めた。……彼も、自分の獣臭さがこんな所で役に立たれても嬉しくないだろうな……。

やっと眠りにつき、起きた頃にはもう太陽は真上だった。

私は花を探すと言って立ち上がると、犬はその前に腹ごしらえだという。

病弱で世間知らずのレットルを吹き飛ばさん限りの肝の据わり具合とアクティブっぷりを出した私だけけど、流石に惨殺現場でのんびり食事は無理だ。織田信長ならできるかもしれないけど。

それらを凝縮して「女の子は繊細なんだ」の一言に纏めて言つと、向こうに食糧庫が小さいけれどある、とのご返答。

「…何で分かるの？」

「この通り鼻は良いからね」

「食べれるのかな」

「大丈夫。手前のは新しいから」

そーっと扉を開け、暗い部屋に入る。

積み重ねた箱の中から一つだけ蓋を開けると、赤い宝石が詰まっていた。犬がソーセージを食べる背後で、恐る恐る母に手を伸ばす。

「……美味しい」

「こつちを優先して良かったらろう？」

「うん……」

苺の甘酸っぱさと犬の優しい声に思わずぶわっと涙が押し寄せる。

昨日の夜、もしあのまま諦めてたら。この犬が来なければ。私は生きてる事の喜びも有難さも分からず生を終えていた。

そう思うとこの犬は私のヒーローだ。…後であの汚い身体を洗ってあげよう。確か石鹸は二階にあった気がするし。

「……ほら、肉も食べないと」

「苺でいい」

「駄目だって。…あ、チーズとパンがあったよ」

やけに世話焼きな犬は大発見だ！と言わんばかりに尻尾を振る。

向こうの家ではスプラッタな事件が起きたばかりなのに、何だかほんわかしてしまう仕草だ。

*

腹ごしらえも終えて、私は犬が見つけた花畑でぶきつちよな花輪を作っていた。

顔に似合わず、私はこういうのが苦手だ。逆に碧は得意だったけど。

犬があーでもないこーでもないと教えてくれる通りに七人分をせつせと作ると、隣が急に静かになった。

どうしたの、と手を止めると、犬は鼻先に蝶々を一匹くっつけてスピスピ眠っていた。

昨日の勇敢さが嘘のようなその姿。

あまりにも可愛らしくて、私は花を一輪、二輪と抜いて犬の身体に振りかける。だんだん獣臭さが消えてくのに、ファブーズしてみたいだと思った。

(もしかして夜、寝てなかったのかな…)

ただの昼寝かと思ったけど、死んだように眠ってるこの熟

睡っぷりは違っ気とするし。

…だとしたら申し訳ない。昨日は走って吹き飛んで転がって疲れた
だろっに、番犬役をさせてしまったとは。

私は少しだけ遅く花輪を編んだ。

30分ぐらい過ぎ、のんびりと六個目に手を付けた時、急に犬はがばつと起き上がった。

蝶々は逃げ帰り、花は四方八方に飛んでった。私はびっくりして20?位まで出来た花輪を引きちぎってしまった。

「ど、どうし」

「動くなよ!」

犬はそう言うな否や、私の背後に広がる森の中に駆けてゆく。
しばらくの後、唸り声と一緒に何か落ちる音、引きずる音がした
のに慌てて鞆を引っ掴んで犬を追いかけた。

「な 何してるのっ」

「君…動くなつて言つただろう!？」

「あんな物騒な音したら心配するわよ!……ていつか、」

そのオジサン、誰？

私が指で指したそこには、犬に噛みつかれ破かれた服を着た、弓矢を持った細身の中年。

気付かれたにしろ向かってくる時に射抜くことが出来ただろうに、このオジサンは細身の、先程までスピスピと眠っていた犬に負けたのだ。……犬が強いのかオジサンが駄目駄目なのか分からないけど。

「……ジョブチエンジしたら？」

「う…うるせえええ!!」

オジサンは犬に押し掛かられた状態で私を睨む。対する私はオジサンの装備、弓矢を奪いにかかった。

「商売道具に触るな!」

喚いて暴れるオジサンに、犬は耳元で低く唸った。すると短く悲鳴を零して震えだす。…まあ、私もあんな目にあつたら震えて泣きだしそつだ。犬が恐すぎる。

ザッ

リアル犬のおまわりさんを見た気がする私は、何かを蹴るその音に

ばつと正面を見る。

犬はすでに気付いているようだが、どうするべきか悩んだよう動かない。

その隙に、私から見て斜め横の木から、筋肉質の男が飛び降りて棍棒を犬目掛けて振り下ろす

！

「げぶえっ」

前に、私が男の額に一撃を入れる。

額に走った衝撃に息を飲み、そのまま頭から地面に落ちた声が例の「げぶえ」だ。

私は淡々と痛みに呻く男から棍棒を奪い取って向こうに投げ捨てる。口汚く罵る男の顔を、無言で踏みつぶした。

蛙みたいな声を出した男を蹴り飛ばし、そのままふらりと振り向く。

私は血の付いた鞘を手に、優しく弓のオジサンに微笑んだ。

＊
（限界の白雪と番犬）

7. 『屑』のローラント

とりあえず、あの男達の始末に関しては省略させていただく

というのも、のんびりとした時間が二回も襲撃によってぶっ壊された私は、自分が何をしたのか覚えていないからだ。

その、怒りなのか恐怖心なのか分からない、犬と一緒に居る事でギリギリを保っていた『それ』が、もの見事に決壊、破裂、爆発：とにかくそんな感じで弾けてから、気づいた頃には花畑で花輪を編んでいた。

白昼夢だったのかと一応犬に聞いてみると、目をそらされた。そしてただ一言「あの二人は生きてるから気にするな」と含みがちに言われた。

そうして陽が真上から少し傾いた頃には七人分の花輪が出来た。

昨日の内に犬が器用に作った木の十字架に花輪を掛け、摘んだ花を一束ずつ捧げて手を組んだ。

神様への言葉ってどんなものか分からなかったから、ただ黙って彼らに感謝と謝罪の言葉を心の中だけで済ませる。

「 さて、と…」

私が立ち上がると、犬も立ち上がる。

血で汚れた居間を抜けて、二階に上がってタオルと石鹸を取り出す。隣の部屋は綺麗だったから、今日は此処で休もう。

犬は大人しくちゃんと座って不思議そうに見ていた。私が桶を手に取りると急におたおたし始めたが、無視して「ついてきて」とだけ言っただけで湖に向かった。

小人の言葉を頼りに行くと、何とか綺麗な湖に辿り着いた。

本当は小人の家にも風呂はあるんだけど、薪をくべるタイプで私は使い方というか火の調整が分からないので断念した。

「こっちにきて」

「……いや、あの、水浴びくらい自分で…ひゃあ！」

「あ、冷たかった？ごめんごめん」

とか言いつつ問答無用でぶっかける。

水に濡れてぐっしりとした毛に石鹸を泡立てれば、段々と黒い毛が見えなくなって彼は白い泡泡の塊になった。

「痒い所ありますかー？」

「…ないです」

言葉から疲れがはつきり伝わるが、私の手は休むことなくもしゃもしゃわしゃわしゃして犬の泥や返り血を落とす。

私は泡だらけで「解せぬ」と顔に書かれた犬に抱きつくくと、耳元で恥ずかしさを隠すような小さな声で囁いた。

「ひゃあ！」

「…地味に傷つくのだけど……ねえ、」

「な、何？」

「…助けてくれて、ありがとね」

じわ、と涙が出かけたがきつと泡のせいだ。犬はおろおろしてその鼻先を私の頬に擦り付けた。

「くすぐつたいよ」

「………僕は」

「？」

「僕は、…愚かで、自分の事しか考えていなかったんだ」

急に、静かで泣きそうな声で、犬はぼつりぼつりと続けた。

寂しくて、一人はもう嫌で、恐ろしいことをしてしまった。きつと許されない。愛される価値がない。

「…でも、許されたくて、微笑みを向けてもらいたかった。
…僕は魔女に背いて呪われた身だ。魔女から逃げて逃げて
偶然、君に出会った。

助けたら、隣に居る事を許されるかもしれないと思って…僕は、
君の思うようなヤツじゃないんだ。自分の事しか考えられないんだ」
「……………」

「だけど、それでも君の隣に居たい。君を守って、許しを乞いたい
…」

犬は段々と声を小さくしてそろそろ私の腕から出て行こうとする。

私は黙って腕を離し　　犬の額に自分の額をぶつけた。

「痛い！」

「私も痛いわ…あのね、あなたが寂しがり屋でネガティブで正義
漢じゃないのは別にどうでもいいのよ　　私にとっては。

私は『結果的に助けてくれた』あなたにお礼を言ってるの。その事
にあなたが根性悪かろうが犯罪者だろうがどうでもいいの。

…確かに感謝した、あなたが居てくれて助かった奴が居るって事、
忘れないで」

「……………」

「第一、許しを乞うなら私じゃなくてその…被害者？にしないでよ。
私は神様じゃないのよ。私を免罪符代わりにしないでちょうだい」

ばしゃっ、と水を犬に叩き付ける。

「ご、ごめ…ぶふっ」と謝る犬に問答無用でまた水をかけ続けると、
私にも飛沫が飛んで服が残念なことになった。

「か、風邪ひいちゃうよ!」

「そうね

ねえ、」

「?」

犬の体にまだ泡が付いているだろうかと指先で彼の黒い毛を弄りながら、私は桶に水を入れた。

「……ねえ、一緒に……その、旅をしない?」

「旅?」

「私はこの世界についてよく知らない。一人だと心許無いし……あなただって、その呪いを解きたいでしょ?……寂しいのは嫌なんですよ?……どうよ」

「……いいの?」

「あなたに聞いているの!」

恥ずかしさを誤魔化すように、もう一度水を叩き付ける。

そして顔を見られないようにタオルで覆うと、犬はもごもご言いながら「行く!」と答えた。

「……そういえば、自己紹介がまだだったわね。私は^{ヒツギ}柩。白雪^{シラユキ}。あなたは?

「僕は……僕は、『屑』のローラント」

「屑?」

「……駄目でだらしなくて情けない、愛される必要のない男の名前だよ」

「　　じゃあ今日から『白雪の』に変えなさい。……ていうか、あなたどんだけネガティブなのよ…」

ゴシゴシと拭き続け、やっとタオルで体を拭き終わると、ちよっと嬉しそうな犬　　ローラントの身体に抱き付く。

ローラントはやっぱり「ひゃあ！」と声を上げた。

「ああ良い香り。野良犬から飼い犬になれたわね」

「飼い犬…ずっと思ってたんだけど、僕犬じゃ　　白雪!？」

「何よ。初めて名前を呼んだのがそんな声なんて嫌だわ」

「な、ななななな何、脱いで…!？」

すぐにローラントから身体を離れた私はブレザーを脱ぎ、リボンを取り、スカートに手を伸ばした所でローラントに吠えられた。

　　ああもう五月蠅い。私だって身体を洗いたいのよ、とだけ言って続行すると、ローラントは慎みがどうのこうのと言った後、拭き終わったタオルに顔を突っ込んだ。

「冷たっ」

純情な彼に背を向け、私は湖の奥まで泳いで髪の毛の汚れを落とす。手入れしてないから不安だったけれど、黒檀の髪は汚れが落ちた途端、艶々と輝いた。

石鹸で顔や体を洗い終わって、タオルで体を拭き終わると持って来た服に手を伸ばす。

（お別れか…）

ブレザーは風で切れて、これ以上着続ける事は出来ない。

タオルを身体に巻いて、此方に背を向けているローラントを確認してから、私はケータイに手を伸ばした。

『 …… 白雪、お誕生日おめでとう。 夜の く
らいに、そっちに行っても 』

不意にピッ、と音がした。耳から離して画面を見ると、『充電してください』の表示。

「……………」

待ち受けの私達二人を目に焼き付けて、瞳を閉じる。

開けた時には、もう二人は映っていないかった。

私は、髪から滴る水と涙をごちゃ混ぜにするようにタオルで拭いた。

*

(帰るまで、泣かないんだから)

8・お菓子のお家

人形のような金髪。美しい空色の瞳。真珠の肌。

その柔らかな唇で、一言「好きだ」と告げてくれたなら、私はどんな困難だって乗り越えて見せるわ！

すき、好き、大好き。貴方が愛しくてたまらない。何を捧げててもかまわない。それで貴方の心が入るのなら。

いつそ、その手でこの恋情に、焦がれる胸に、終焉を与えてくれたなら！

*

「ねえお兄様。ここは…どこなのかな？」

「……家の向こうの…西の…山の中じゃないかな……？」

金髪の双子は、月に照らされた不気味な道をただただ進む。

気が付いたら山の中にいた　　本当は森なのだが　　彼らは、
目印に月の明りを反射する白い小石をポケットと前掛けに入れて、
少し進むごとに石を一個置いていた。

「お兄様、もう手が痛い……」

「ごめんね、後少し……せめて視界の良い所に出るまで、我慢して……
ね？」

「……」

双子の兄は優しく疲れを隠して宥めるが、妹は遂には俯き……泣きだしてしまった。

「うわあああん、もうやだっ、お家に帰りたい！お父様、お母様、
アニー……皆の所に帰りたいいいいい！！」

大事に大事に育てられた妹は生まれてこのかた親の手が届く範囲でしか外を知らない。

飼われていた小鳥が急に野に放されたような　　そんな気分になつた彼女は、しゃがみ込んでわんわん泣いた。

兄も同じく泣きだしたかったが、泣くことに体力を使うよりも先へ進むことに使った方がいいとすでに結論づけていたので、そこは耐えて妹を落ち着かせようと手を伸ばす。

けれど恐怖心が溢れて止まない妹は、冷静な兄のその態度が逆に怖かった。

このままいつそ二人で全てを吐きだせたなら、彼女は諦めるなりして落ち着いて兄の言う事を聞いたかもしれない。

妹は伸ばされた手を叩き、そのまま駆けだす。兄が後ろから慌てて追いかけてくるのが分かった。

「あつ」

追いかけてくれたのに安堵した途端、妹は木の根に足をとられて下り坂を転がり落ちた。ぐきり、ごき、ともかく本能的に身を竦める音が左足からする。

彼女が痛みを認知し始めた頃には兄が追いついて妹の傍に座って足の様子を診た。

物の見事に骨折した妹はわんわん泣く。声にならぬ声でこの痛みを訴えた。兄はほとほと困った。

聞きかじりながら、足に木を添え、前掛けを裂いて包帯代わりに木と足を結び付ける。…後に、妹にお気に入りの前掛けを裂かれた事で泣かれることになるのだが。

兄は、今はもう掠れた声ですすり泣く妹の傍で、上着を脱いでそっとかけてやった。そのせいでどんどん冷えていく身体を抱きしめていると、道の先から明りが漏れた。

びっくりして固まっていると、その明りは緩慢な動作で高度を下げ

た フードを被った老婆が、おやまあと眉根を上げていた。

「お二人さん、こんな所でどうしたんだい？」

「あ の、気づいたらこの山に……迷っていたら、妹が……」

しどろもどろに兄が答えると、老婆は先程の動作が嘘のような素早さで妹の傍に屈んで、お粗末な足を診た。

「ああ 折れてるねえ。よしよし泣くでないよ、すぐ向こうに私の家がある。向こうで治してあげよう」

そっちの方、持ってくれるかい、と老婆は兄に言つと「よいせ」と声を出して妹の肩を持った。慌てて兄も同じく肩を持つと、そろそろと老婆についていく。

「あの……あのう、どうしてこんな時間に……」

「んん？……何、このお嬢ちゃんの声が何度も聞こえるもんでねえ。

最初、野犬の声かと思っただよ」

朗らかに笑つと、魔女は骨ばった指を伸ばす。

その先を見つめると、一件の家が建っていた。

「 わあ……！」

その家はとても慎ましい、比較的綺麗な家だった。
けれども兄の目にはお菓子で作られた
した家が、あったのである。 かの「お話」を実現

*

その夜から、双子はこの『お菓子の家』に住む事になった。
痛みの落ちついた妹は、母親の腕の中で何度も聞いた彼の家である
と知った時、頬が林檎色に染まるほど興奮した。……そのあと足の
痛みで青ざめてしまったが。

足を癒す間、妹は松葉杖を与えられはしたが日がなベッドの上で過
ごした。

兄はその間、住ませてもらっているお礼に慣れぬ家事に追われてい
た。
薪を割り、火をなんとか点ける作業のせいで手は血豆だらけになっ
たが、この家の老婆の孫娘が、痛む手を擦るたびに不思議な薬を作
っては丁寧に塗ってくれた。

はたまたお菓子と紅茶を差し入れてくれたり、簡単に終わらせるコツを教えてくれたりもした。

……優しく労わるような少女に、彼は次第に甘えて心を開くようになった。

もし彼が温室育ちでなかったならば、彼女の行為は媚で計画的であり、俗的に考えれば自分の容姿に惹かれたからの好意だと気付くのだが、彼の中では変わらず彼女は心根の優しい、思いやり溢れる少女だった。

そんな彼女は長い薄茶の髪を三つ編みで緩く編み、ハシバミ色の瞳に視力が悪いのか大きな眼鏡をかけている。

それはそれで可愛いけれど、眼鏡をとった姿も見てみたいな、と彼女と紅茶を飲みながら何となしに言うと、彼女ははにかんだ笑みしか返さなかった。

「君と同じ瞳と髪色の男の子を知っているよ」

「まあ、お友達？」

「うん。いつか、君にも会わせたいな」

彼女は俯いて「そう、」とだけ言った。

そうして、だんだん血豆も出来なくなった頃、妹はだいぶ痛みも引いて、松葉杖をつけて外に出るようになった。

兄は妹に住まわせてもらってる身なのだから家事を手伝うように言うとうと、最初の内は妹は素直に従った。

というのも、最初は物珍しさで老婆と孫娘の二人が優しく教えてくれているので悪戦苦闘しながらも手伝っていたのだが、彼女の綺麗な手が荒れ、服も汚れてから、二人に文句を言ってまた部屋に籠るようになってしまった。

その度に兄は諭して何度も部屋から連れ出したが、連れ出す度に妹は不貞腐れ、家に帰りたくて悲しそうであった。……口癖は「いつになったら帰れるの？」になってしまった。

そして勿論のこと、兄は妹の口癖に答えられない。妹はどんどん荒んでいった。

ある日、そんな何回目かの問答をしてから居間に入ると、ロッキングチェアに座って、孫娘が火にあたりながら刺繍をしていた。

帰って来た事に娘が気付き、双子に「おかえりなさい」と微笑む。そして手を止めて立ち上がるうと

「きゃあっ！」

椅子から立ち上がる瞬間、妹は彼女を暖炉に押し倒した。

綺麗に縫っていた布は火の中へ。娘が暖炉に手がぶつけ、顔を顰める頃には妹は兄に頬を叩かれていた。

「……」

初めて叩かれた頬を抑え、妹はその瞳にじわりと涙を浮かべる。

兄と違って一人で満足に外に出た事もなければ、使用人の真似をしたこともない。ここは自分の家じゃない。頼れる人は兄しかない。…そして兄には自分以外にも頼れる人がいた。

少しずつこの変な生活を受け入れていく兄が、どんどん遠い人になって寂しかった。その溜まりに溜まった衝動。

特に自分に敵意を向けた訳ではない、丁寧に仕事も教えてくれた彼女に八つ当たりのようにぶつけたのは、ぎりぎりを保っていた自分に、まるで此処がお前の家だというかのように微笑むから。

……「おかえり」なんて言っているのは家族だけだ。

なにより妹は彼女が嫌いだった。生理的嫌悪と言うのか、外の世界をよく知らない妹でも、彼女が兄にすり寄るその媚は、好意は汚らわしくてしようがなかった。

たった一人の半身を奪う魔女のようで、恐ろしかった。

娘はずれた眼鏡も直さずにそっと妹を見る。妹も視線に気づいて

彼女はこの時、初めて娘の顔をしっかりと見た。今まで俯いて物を言う彼女の顔など、見る気もなかった。

「あ、」

ハシバミ色に射抜かれて、妹は全ての機能が止まったようだった。そして、家に帰る事が出来ぬ原因を、知ってしまったような気がした。

「どうしたんだい？」

動かない三人に、老婆が奥の厨房から出て来た。

叩いたまま動きが止まった兄と、頬を押さえ娘を見て固まる妹。手を押さえ、妹を見据える娘。暖炉には老婆の服に、と丁寧に縫っていた刺繍が火にくべられていた。

「ああ……刺繍が。怪我は、怪我はないのかい……？ああ、可哀想に
グレーテル！」

今まで穏やかな声しか聞いた事のない双子はびくりとその声に身を竦めた。

老婆は骨ばった手で頬に手を当てる妹の腕を掴むと、乱暴に外に連れ出す。兄は慌てて扉の前に先回りすると、深く頭を下げた。

「す、すいませんでした！妹にはちゃんと言い聞かせますから」

「この家から出さないで下さい！」

「いいや、若いの。この小娘にはきっちり反省してもらおう。タダ飯

食って部屋に籠るだけのくせに…恩を仇で返すとはこういうことだよ！」

「ま、待って下さ…！」

老婆とは思えぬ力で兄を床に叩き付けると、老婆は暴れる妹の腕をぎゅちり掴んで吐き捨てた。

「安心おし、ちゃんと屋根のある部屋をお前にやろう。そこで食べれるだけ食べてぶくぶく太れ。お前さんが子豚ほどになったその時、丸焼きにして皆で食ってやるよ！」

「い、いやっ、お兄様…！」

「ま、待って

がちゃん。

扉は閉まり、妹が喚く声が微かに聞こえた。

兄はすぐさま扉を開けようとしたが、結局それは叶わなかった。力任せに開けようにも扉はびくともせず、しまいには兄はずるずると扉の前で崩れ落ちた。

涙が零れそうになって唇を噛むとスツと影が差し、薄茶に緩い三つ編みの彼女が隣に屈んで心配そうな目で兄を見つめる。

擦りむいた手を労わろうと手を伸ばし
その手がぶつけて血
が出ていた事に気づいて引っ込めた。

けれどその前に兄がその手をとると、掠れた声で「ごめんね、」と

謝った。

「ごめんね、ごめん。僕が駄目だから　君に怪我をさせて、妹にまで……僕は」

「自分を責めないで。あなたは悪くないわ……私も、配慮が足りなかった……もっと妹さんの事、見てあげればよかった……」

ハシバミの瞳に涙が浮かび、ぽと、と一滴兄の頬に落ちた。彼は余計に心が苦しくなった。激しく自分を責めた。

「お祖母さんには、今すぐは無理でも明日には許してあげるように言ってみるわ。……お祖母さんは、私が苛められたと思っただけの。早とちりな人だから……」

「いや　ありがとう。僕も頼みこんでみるよ。その前に、君の手を診ないと」

立ち上がり、人の裏側を知らない双子の兄、『ヘンゼル』は彼女の手をそつと握った。

*

(お菓子のお家に住む双子は、忘れ物に気付きませんでした)

9 ・ちぐはぐな二人（前書き）

最後、少しエロっぽく見えるシーンが入りますので、ご注意ください
い。

9・ちくはぐな二人

「あるー日、森のっ中、野犬にー、出会ったー花咲くもーりーのみーちー野犬にーでーあつたー」

「……そういうふざけた歌を歌うから、こついう事になるんだよ」
私と黒い犬ことローラントは、日の傾いた森の中で背中合わせになつて様子を窺う。

このふざけた歌詞で分かるだろうが、今現在、私達は野犬の群れに囲まれているのだ。

ぐるる…と涎をだらだら流しながらこつちをガン見する野犬。
しかし此処に至るまで熊に襲われ暴漢に襲われ、魔女の手先らしいゾンビとかに襲われれば変な余裕が出てくる　いや、麻痺してるだけかもしれないけれど、とにかく冗談を言えるくらいには嫌な成長を遂げてしまった私は、ただ淡々と武器をセットした。

「そつだ、彼らに穩便に黙って帰ってもらえるように交渉できない？ 同じ種族じゃないの」

「だから、僕は犬じゃなくて

「　　ッ伏せて！」

ヒュン、と私のクロスボウが横からローラントに噛みつこうとした野犬の頭を打ち抜く。

……ちなみに、前回大活躍した王子様の鞘は小人の家に捨ててきた。代わりに何かないかと家を荒探しして出てきたのは包丁か鋸ぐらいで、私が包丁を布に包もうとしたらローラントが少し小さいクロスボウをどこからか引っ張り出してきた。……最初から出せよって思ったのは内緒だ。

「これ使い難い…やっぱり包丁にすれば良かった、わ！」

「もつと使い難いだろっ」

私が何とか群れから離れる間、ローラントは踊るように野犬の間をすり抜けて、野犬に噛みついたり蹴りついたりする。

注目がローラントに集まっている間に、私は矢をセットして狙いを定めた。

手順は簡単だし、そんなに力も剣と違っていらぬのに、距離とか色々合わせるのが難しい。それでも唯一良い点は、斬りかかる感触がないってことぐらいだ。

「キャンっ」

またヒュン、と風を切る。

ローラントに二匹がかりで喰らいつこうとした野犬の一頭を狙い打った。少し標準がぶれたけど、野犬は二三歩ヨロついて倒れる。

（ ああ、もう……私、 ）

慣れちゃったなあ、と苦い笑みを浮かべた。

*

辺りは真っ暗闇。

私とローラントは木の下で崩れ落ち、重なるように倒れていた。

「つ……疲れた……」

ローラントの黒い毛並みに顔を埋めながら、何とか息を吐く。フハ
フハと危うい呼吸のローラントは「僕も」と掠れた声で同意した。

「どう……する？此処で寝ちゃっつ？」
「もう少し……見通しのいいところ……」

動こうにもどうにも動けない私達はそこで会話を切り、殆ど同時に眠りについた。

…

あの爆睡から少し経ち、私達は三つ編みの女の子に起こされ、危ないからと彼女の家で朝を待つことにした。

……のだが、どうにも疲れてたし、元が丈夫じゃないし、こんなに動きまわった事もなく　　私は三日目の夕方まで眠りこけていた。

やっと起きた頃にはローラントはもう起きていて、眠る私の代わりに自己紹介と簡単に旅の目的を話してくれたらしい。

ちなみに、私達を起こしてくれた、長い薄茶の髪を三つ編みにして、大きな眼鏡をかけた女の子は『ロゼ』という名前だという。

同じく住まわせてもらっているらしい金髪の男の子（一瞬、あの王子様かと思つてローラントに抱きついてしまった）の名前は『ヘンゼル』で、二人とも私と同一年らしい。

私はそう聞いた瞬間、じゃあこの男の子も『向こうの住人』なんじゃないかと思つた。こんな世界、『空棺墓場』ではない世界から来た……私と同じ。

……でも、もしこの世界が、私の『白雪姫』と同じく、あの童話をなぞっているのなら『ヘンゼル』の彼には『グレーテル』がいるはずなのだ。しかしこの家にはグレーテルの「グ」の字もない。

予想外に長く降る雨に、暫く此処に留まる事になった私は住まわせてもらっているお礼に掃除をしながら、何度かその事について聞くうとして……いつもロゼやローラントに邪魔される。

それにも疑問が沸くけど、ローラントがいやに必死に邪魔するものだから、私は次第に聞くのをやめた。

…変な疑りをしなければ、三人と過ごす時間は楽しかった。

「はー」

「……？白雪さん、どうしたの？」

「ああいや、…雨、止まないなあ……」

「そうだねえ……ここまで長く降るのも珍しい……」

いつもロゼにひっついていてヘンゼル。彼は珍しく一人で、窓の向こうを見つめる私に声をかけてきた。

聞いてみると彼女は今、昼食の準備にかかっているらしい……ちなみに、ローラントは何処かに行ってしまった。

「……こう言ってしまうのはいけないんだろうけど……二人には出て行って欲しくないな。とても賑やかで楽しくて……気が紛れる」

「え？」

「……ごめん、気にしないで。……あのね、ロゼが白雪さんの事『お姉さんみたい』って。『いつか二人つきりでお茶をしてみたい』って言うってたよ」

「お姉さんか……私、一人っ子だったから、そう言われると嬉しいわ。ロゼなら良い妹さんになれるかもね」

「なーに、それ。『お嫁さん』みたいな言い方」

「だってあの子しっかり者だし……あ、ロゼって一人暮らしだったの？」

どンドン咲いていく会話の途中、急にヘンゼルが黙った。

そして小さな声で「お祖母さんがいらっしやるけど、部屋から出てこなくて……」と答えるのに、私は「そうなんだ。挨拶とけばよかったかな、」と早口に言い切る。

暗い空気をかき消すように、私は努めて明るい声を出した。

「まったく！ローラントったら何処行つたのかしら？外は雨だつて
いうのに……」

「うーん、やつぱりじつとするのは嫌いな性分なんじゃないかな……」

「でも、……内緒だよ？」

「……………？うん」

私が頷くと、彼はきよろきよろと辺りを見渡せてから、小さな声で
続けた。

「……ちよつとだけ、彼が怖いんだ。ずっと君と話したかつたんだけど、
彼がよく隣に居たから……あ、嫌いとかじゃないよ！？ただ怖
いなくて……少しだけっ」

「はいはい。……でも、ローラントってそんなに怖いかな？いつもの
んびりしてるし、悪さもしいし……」

「んー……なんていうか、こう……忠犬のフリをした狂犬というか、
羊の皮を被った狼というか……いざとなつたら平気で噛みつきそう、
というか」

ローラントが？と首を傾げると、ヘンゼルはこくと頷いた。

忠犬のフリをした狂犬……どう見ても無害な犬にしか
思えない。

……あ、でも野犬とかに対しては凶暴というか、いつもの穏やかぶり
が嘘みたいなの暴れようというか……うーん。

「……………」

「…ごめんね、気分悪くしちゃった？」

「ううん、大丈夫 ……はあ、また雨足強くなってきた…」

「本当だ…あ、でも不思議だよね、」

「何が？」

「此処、『お菓子の家』なのにさ、お菓子は溶けないし虫に食われないし、こんなに激しく降っても雨漏りもしないし…」

「え、」

ぽかん、と思わず間抜けな顔を晒すと、ヘンゼルはきょとん、としてからややあつて笑った。

「ああ、白雪さんは寝惚けてたから見てなかったかもね。此処、内装は普通の家だし…。あのね、外は美味しそうなお菓子で飾り付けられてるんだよ！」

「へ、へえ…。見てみたかった、な…」

(……………お菓子の家?)

実は、雨足が弱くなり、霧雨のような天気の日、私はこっそり外に …… といつてもすぐに家に戻ったけど …… 出て、この家を確かに見た。

ずっと疑問に思っていた、童話の『ヘンゼルとグレーテル』をなぜ知っているのか、どうなのか。

それを確認したくて、『ヘンゼルとグレーテル』を象徴するものの

一つ、『お菓子の家』かどうかを確認したかった。

結果は普通の……まあ綺麗な家で、お菓子が作られたわけでも、お菓子がそこかしらに飾られている、なんてことも無かった。

そこで私は『グレーテル』がない『ヘンゼル』だから物語が成り立たない……つまりこの家は、『ヘンゼル』は童話をなぞっていない、と考え

その日から、彼らへの疑問を封じた。

「あ、良い匂い。…ロゼのご飯はいつも美味しいから、毎日とても楽しみにしてるんだ…」

ヘンゼルの浮かれた声に相槌を打ちながら、私はずっと閉じ込めていた疑問の封を開けた。

*

月×日

「ヘンゼル！？その類は……お祖母さんが貴方を叩いたの？なんてこと……！今すぐ冷やさなきゃ」

「ああ泣かないで。……グレーテル？グレーテルなら……向こうの蔵で……ええ、大丈夫。寂しがっていたわ。ちゃんと食事はとって……そうね、……自分を責めないで……」

月 日

「そんな顔しないで、ヘンゼル。大丈夫よ、え？お祖母さんが怖い？……心配しないで、貴方は私が守るわ」

「……勿論、貴方を一人にはしないわ。……さあ、顔を上げて。貴方に、胃に優しいものを作ったの。今日はもう寝ましよう？お風呂も沸いてるし、とにかく今は休みましょう？」

月 日

「きゅっ、びゅっ、びゅっ……泣いてないわ。目にゴミが入っただけ……だからっ泣いてなん
か」

「……うん、グレーテルにね……しょうがないわよね、私のせいだもの……ふふ、優しいのね……つく、……っ……だ、だってあ、」

月日

「こら、摘まみ食いしないの！もう、笑えば誤魔化せるとちよつと、やだ、くすぐらないで！もう！」

「……あら、どうしたの？……眠れない？ああ、今日は新月だものね。……ねえ、あのね、グレーテルのひゃっ！やだ、貴方の手、冷たい……からかったわね！」

月日

「……ねえ、もう寝ちゃった……？……ねえ、××××××××
あっ、お、起きてたの！……今起きたとこなの……そう。
……何でもないわ。もう、寝ましようっ。
「……っく、……っ……あっ……」

馬鹿な子。ああ、本当に馬鹿な子だ。知らないでしょうっ？そうだね、知らないけれど。……でも、きつと本当だ。

あの夜、確かに恋情の花を手渡しあったのに、
両者ともその花には
微かに殺意の棘がのぞいてる。

*

(その痛みも心地良い、と君は笑った)

10・舞台裏

本当はね、知ってたの。

春の日差しのもどろみの中で、気持ち良くて目を閉じていた私に…
…あなたが触れたこと。

優しく私の髪を一房手にとって、あなたは紳士のように口付けたわ。
薄眼で見たあなたは、ほんのりと少しだけ頬を染めていて可愛らしい筈なのに、私にはどこか怖く思えた。…あなたを異性として見たからかもね。

スツと顔を上げたあなたに、私は慌てて目をしっかり閉じた。
真っ暗な世界の中で、やけに低くて掠れた声を聞いた　　初
めて、熱の籠った声で「白雪」と呼ばれた。

私は起きる事が出来なかった。今起きれば実は見ていたことが気づかれるんじゃないかと思って、私は結局眠り続けることを選んだ。

彼はするりと髪から手を離すと、チュニツクとズレ落ちたカーディガンの間から見える二の腕に、キスをした。

私は見えないものだから、急に冷え症の肌に熱い唇が触れたのに驚いて　　思わずびくりと肩を揺らしてしまう。

彼はその反応に同じくびくっと離れ、先程の熱が嘘のような声で、恐る恐る私の名を呼んだ。……私は、また沈黙を決め込んだ。

そして反応を見せない私に安心したのか、彼が大胆に近寄る気配が

あれ、記憶と違う　私の頬に手を伸ばし、

「白雪、姫」

碧の声じゃない。

私は恐る恐る目を開けて彼を見つめた。…目が合つと、彼は微笑んだ。彼は　、

「白雪姫。君の、王子様だ」

すう、と絹の手袋が私の首筋を辿る。

気が付けば、周囲はアロマの香りじゃなくて自然の　　花の香り
りと、森の香りが私を包んでいる。

それは鎖のように私に絡みついて、あの時のように逃げだす事が出来なかつた。

「さあ、僕のお城へ

…おいで、白雪や」

微笑む王子が急に魔女へと滲むように姿を変える。

私は声が出なくて、ただただ嫌だと首を振ると、魔女は私に手を伸ばした。

そ、と。…首に、冷たい手が、

*

「
ッ!」

思わず、私は枕を向こうの角に投げる。

ビュン、と飛んでいった枕は、器用に前足で扉を開けて部屋に入っ
て来たローラントに当たった。

「はぶっ」

寝起きに投げた枕はまるで白い弾丸のようだった。

変に感心してぼんやりと見つめる先では、物の見事に彼の顔に当たった枕がぼたり、と落ちる。

「御挨拶だね、白雪」

「！」

歪む視界の中で彼のむすっとした顔が見えたけど、私は何も言い返せなかった。

咽かえるように、急に引き攣った喉に震え、冷水を浴びたような身体を両手で抱きしめてベッドに落ちた。

(寒い寒い寒い！息が可笑しいよ、苦しいよ…)

「白雪!?!」

叱ろつとする前にベッドに倒れた私を見て、ローラントは急いで私に駆け寄る。

近づいてやっと呼吸がおかしい事に気付いて、彼は掠れた声で留める間もなく風のように部屋から飛び出していった。

「し　　白雪!？」

一分も経たない内に、彼はロゼを伴って私の所に戻って来た。

朝食の準備をしていたら彼女は嫌な顔一つせずに私に袋を手渡し、落ち着くようにと背を優しく擦り、湯冷ましをサイドテーブルに置く。

「落ち着いた……?」

しばらくして、私は使い終わった袋を返して切れ切れの感謝の言葉を述べると、ロゼは首を振って私の布団をかけ直した。

「…よく、起きるの?」

「ん…最近はおまわってただけど……嫌な夢見ちゃったせいかもね、ごめん」

「謝らないで」

私は昔からよく過呼吸を起こしては周り（主に父と碧）を騒がせて困らせていた。

特に、碧には両親の目の届かない所でも面倒をかけてしまったものだから、非常に申し訳ない。…その旨を告げると、彼はいつも怒っ

てしまうから心の中だけで留めているのだけだ。

「辛いのなら、我慢しないで」

何度も、その言葉を碧から聞いた。

例えば、両親がいない夜にとか。

私はよりにもよって酷い過呼吸になってしまって、震える手で碧に何とかメールを送り……それを見た碧が大汗かいて我が家に来てくれた。

……同性の友人じゃなくて、彼に気力を注いでメールを送った理由はやっぱり……ずっと一緒にいた時間のせいというか、惰性というか　とにかく私は申し訳ないと言いつつ「困った事があったら碧に」と心の奥深くでそんな身勝手な気持ちを持っていたせいかもしれない。

あれは確か、お互い中学三年の頃の秋……だったような。

丁度、碧は受験勉強に勤しんでいた途中だったからメールに気付いてもらえた訳で……もし彼が寝てたら私……いや、考えるのは止そう。

更に余談だと、一緒に遊んでいたのが彼は玄関の鍵の隠し場所を知っていた。

でも焦り過ぎて御近所迷惑な騒ぎ方をしてしまい、私の面倒を見てすぐに騒ぎに心配した御近所さんに謝りに行った

(……温かい)

結局、朝を迎えても一緒に居てくれた碧のように、ロゼは優しくな、母のような表情で私の頭を撫でてくれた。

「熱も高いし……色々あつて疲れたのかもね。今日はゆっくりして身体を休めて」

「大丈夫だよ……」

「そんな真つ白な顔で言われてもねえ……」

私の首まで隠れるように布団を引っ張ると、ロゼは私の頬をぶに、と突いて「大人しくね」と念を押す。

渋々私が頷くと、ロゼはエプロンの結び目を直しながら口を開いた。

「じゃあ、作ってくるわ。何か食べたい物はある？」

「……林檎」

「……林檎？…好きなの？」

「んー…何だろ、嫌いなんだけど、今は…恋しい、というか」

「……そう」

曖昧な言い分に頷くと、ロゼは部屋を出て行った。

急に静かになった部屋には、私とローラントだけ。

夢の余韻を追いかけるように碧が口付けた髪を弄って、私はローラントがおろおろとしている姿を最後に、瞳を閉じた。

なんだか、このまま眠り続けたら

また、彼に出会えるんじ

やないかって。

*

「主人公のいない舞台裏にて」

昏過ぎの事。

ヘンゼルが頼まれた通りに木の实と薬草を磨り潰していると、黙々と床を磨いていたローラントが静かに彼の名を呼んだ。

「なんだい？」

「……君は 帰りたいと、思わないのか？」

「帰る……？」

「君の……家に」

チラチラと扉を窺いながら尋ねるローラントに、ヘンゼルは動かさ

ていた手を止めてのんびりと答えた。

「帰りたいたいよ」

「……そうか」

「……妹が、何度も帰りたいたいと言っていたからね」

俯いてそう言えば、ローラントは耳をピンと立てて「……妹が？」と呟く。そうだよ、と頷けば、ローラントはきよとんとした目でヘンゼルを見上げた。

「妹を家に連れ帰って

それで、落ち着いたらロゼの所に……」

「戻る、と？」

「そうなるかな……僕は……ロゼを、愛しているから」

「……何があっても？」

「きつと。僕は彼女を愛すよ……でも、」

でも、その前に一つだけ、決めている事があるんだ。

小さな声だったくせに、いやにしっかりと耳にこびりつく声音で、彼は微笑んだ。

「……めんどくさい男だな」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ」

またゴリゴリと磨り潰し始めたヘンゼルに鼻を鳴らすと、ローラントはまた床を磨き始めた。

「分かっているんだよ。…薄々はね」

まったく、どれくらい馬鹿なんだろうってさ

*

泊って一日目の頃、夜。

「俺は君の不利益な事はしない。こちらとしても不利益だからね」

「そう。それは有難いわ。では何もせず、彼女が殺されるのを黙って頂戴ね? ……間違っても、変な情で手出ししないで」

「……しないよ。どうでもいいからね」

「…あなたって、表裏が激しいわよね……良い子ちゃん気取って、何が手に入るのかしら?」

「……」

「ああそうだ、報酬をあげましょうか？若い女の心臓って、新鮮な内に喰らえば力になるそうよ　　今のあなたに必要じゃない？」

「いらぬ……反吐が出る」

「……………反吐……？……ふふ、狼あなたが女の子を連れて逃げていた理由の方が、私には思い出し笑いしちゃうくらい　　反吐が出るわ」

「……………」

「狼のくせに、お綺麗ですこと。……………無害そうな顔して、本当はそんな綺麗な息の根を止めたい衝動を持て余してる癖に。『自分は違う』って？一度欲に負けたくせに？」

「……………話はこれで終いだ。俺は白雪の所に戻る」

「……………フン、ああいう男が一番嫌いよ。　　後悔しても、知らないわよ」

誰もいない部屋で彼女は吐き捨てるように言うと、白い首筋の花を撫でた。

*

(表裏の激しい狼さん)

10・舞台裏（後書き）

……読みにくくてすみません。
ちなみにローラント君は裏では「俺」で通しています。間違いではありません。

11・薔薇色少女

私の人生は『薔薇色』ではなかった。……ずっとずっと貧しくて、寒さに震える日々のごとく『薔薇色』か。

私は幼い頃からこの名前が嫌いだった。

何故こんなお綺麗な名前を付けたのかと聞けば、祖母は「お前が生まれた時、薔薇がとても美しく咲いていたのだよ」と、薔薇の御加護がありますようにと願ってつけたのだと言う。

薔薇の御加護なんてない。薔薇の美しさに目をやれるほど余裕がある生活なんて送れなかった。そんな私に、こんな名前は合わない。恥ずかしい。……そう、『宝石』の少女は指を差して笑った。

宝石の少女はいつだって私を苛める。罵る。詰る。……でも、それがどんなに苦しくても、怒りで暴れ回りたくとも、私は耐えて黙り込むしかない。

私は裕福で明るい少女の家庭とは程遠く……暗い家だった。私の両親は流行り病で死んだし、たった一人の身内は私の祖母だけ。私の唯一の味方だったが、何が出来るという訳ではない。祖母は私の中で諦めの象徴だった。

身も心も寒い私は何とか大きなお屋敷で働く事が出来たが、祖母は働くも何も年老いて仕事なんて出来ない。

二人分の食い扶持を得る為、私は男の格好をして働いた。男の方が給金がいいからだ。

だから私が女であることを知っているのは祖母だけ。そのせいか宝石の少女は私に対する暴力は物理的な物が多かった。痩せっぽちの身体は、温室育ちの少女の一振りにも耐えられない。

庭師の下っ端だった私は、自分が面倒を見るようにと命じられた薔薇達の陰でこっそり泣いている事が多かった。

薔薇は黙ってそこで咲き乱れるだけで、私を傷つける事は無い。恥も外聞も無くひたすら泣き続ける事もあった。

そんな、ある日。

「…きみ、どうしたの？」

思わず身体を大きく震わせて、恐る恐る見上げれば　そこには王子様がいた。

絹の服、輝かしい金髪、美しい青の瞳。背丈は私と同じくらいの、綺麗な人。

驚いたの半分、心配そうなの半分といった顔で、彼は薔薇の茂みの向こうから近寄って来た。

「僕は　…」

実は、何と言ったか覚えていない。
ただ吐き捨てるように何かを言った。王子様はそれに顔を歪めて、私の隣に来ると白い指先で汚れた私の頬に触れた。ひどく、熱かった。

「僕に、」

全て、言っただけか？

王子様は優しく微笑む。それは私の堅い蓋をこじ開け、中の汚い泥を吐きださせてしまった。

その温かい腕の中で、私はわんわんと泥を投げつける。全てを吐きだし、汚物を吐きだしたせいか不思議な清涼感が胸にあった。

ただ黙って聞いていた彼は、泣きつかれた私を急に抱きしめると、思いつめた声で謝罪をその唇から零す。彼は、王子様は『宝石』の少女の、双子の兄だった。

それを知った時、私はとても怯えた。明日が怖かった。

私は彼の妹の暴力についても語った。……熱い紅茶を腕にかけられた、整えていた薔薇を台無しにされ、他の庭師から怒鳴られて給金が減らされた。寒い冬の日に雑巾を浸けた水をかけられて往來に出された、毎日毎日、私を否定する。……そう私が他者に、彼女の兄に話した事を知られたら。その報復に、彼までいたら。

王子様は身体を堅くした私に気付くと、腕を緩めて目と目を合わせた。

「もう、君にそんな非道なことはさせないよ。妹のせいで、君をこんなになるまで追い詰めさせない」

僕が守るよ。 例え嘘でも、初めて貰ったその言葉が、嬉しくて。

「ありがとう……」

私は初めて、心から感謝した。
例え彼の想いが一瞬の事だとしても 私は、確かに救われた。

*

王子様は、ちよくちよくと私の顔を見に来てくれた。
温室育ちの彼に市井の話をするとても喜んでくれて、もっとな強
請ってくれるのが嬉しかった。

そして、「友達でいてくれる？」と不安げに手を伸ばして、私を必要としてくれた時。生まれてきて良かったと、初めて思った。

彼の妹である宝石の少女は相も変わらずだったけれど、昔と違って私は強くいられた。彼女もそんな私の変化につまらなくなったのか、度々兄が私を庇うからか　私に手を出さなくなった。

私の世界は輝いていた　薔薇色に。彼が私の名前を呼ぶ度に、私の世界は染められてゆく。

やがてこれは恋であると気付いた頃には、私の胸も膨らみ始め、男と誤魔化すのがきつくなってきた。

今はまだ、栄養不足だから頼りない体つきなのだと思われているが
もし、ばれたら。

……彼に会えなくなる　でも、不安に思うのと同じくらい、
彼に私の秘密を教えたいと願った。

願ったけど……、教えたとしても、この恋は実らない。
今はまだ彼には浮いた話も婚約の話もないけれど　いずれは相
応しい人の手をとるのだろう。私は約束された幸せを掴む姿を、ひ
っそりと眺める事しか出来ない……。

彼は変わらずに私に会いに来てくれたけど、私は段々口数が少なく

なつていった。未来を思うと心は鉛のようになる。

彼はそんな私の態度に離れる事も怒る事も無く　　むしろ、心配してくれた。優しく私の名前を呼ぶ度に、泣きたくなつた。

「いい加減にしなさいよ。お兄様があなたとばかりいるせいで変な噂が出始めてるのよ　　…お兄様の名を、未来を汚さないで！」

十三歳になつて、一月経つた頃だ。

言葉と共に扇子で打たれた頬よりも、久し振りに心が痛かつた。彼女曰く、私のせいで彼は周囲の人間から不名誉な事を囁かれ続けている、一昨日の夜に父親に殴られたのだという。

その言葉に驚いた　　殴られ、怒られても、それでも彼は私に会いに来てくれたのか。

それが友情なのか、人々の噂する神に許されぬ想いからかは分からない。自惚れて良いのなら後者だと信じたい。……けど、それだと余計に私の秘密は明かせない。

私はぐちゃぐちゃの心を抱えて、そのまま屋敷の誰も来ない所で膝を抱えていた　　…ずっとずっと、考えていた。どうすれば、いいんだろうと。

「ねえ、知ってる？来月いらっしやるブランシエ夫人、ついに子供を引き取る事にしたそうよ」

「五年前にお嬢様を亡くされたのよねえ……」

「ええ。もともと子供が出来にくい御身だったし、もうお歳だし……」

不意に、こそこそとした声が頭上から届く。

女中達は二階の窓のすぐ下に私が蹲っているのにも気づかず、窓から風を浴びて小鳥のように囀る。

(子供を引き取る……じゃあ、)

もし、私を引き取ってくれたら、私は貧乏人では無くなる

と同時にこの屋敷にはいられないけれど、彼には不名誉な噂が消えるし、上手くいけばまた会える。

彼が女としての私を認めてくれなくても、傍にいて貧乏人と共にいることほど不名誉な謂われはされないはずだ。……例えば彼が誰かと結婚しても、愛人でもいいからその手をとる事は可能だろうか。ブランシエ夫人が如何ほどの地位かは知らないが、
夢見る事は出来るのだろうか？

私は現実を見る事を放棄した。

黙って職場に戻って怒鳴られながら仕事を果たし、家に帰って僅かに貯めた金で質素なワンピースを買った。初めて、女物を買った。

そして何事も無く過ごしつつ、女中や他の使用人がブランシエ夫人の噂をすれば耳を極限まで澄ませて情報を集めた。

……ブランシエ夫人は南の孤児院に向かう予定だが、きっと気に入る子供はいないだろうとか、西の門から来られる予定だとか……必死に聞きかじった。

「これ、綺麗に咲いてたから、あげる」

「本当？嬉しいな　　ねえ、似合ってるかい？」

「勿論」

それ以外は、彼と昔のように話をしていた。

彼は私の態度に嬉しそうに微笑んでくれて……その度に、私の心は痛みを覚える。愛しく思えば思うほど、分からぬ彼のその気持ちを思う度に、だ。

もういつそ聞いてみたかった。あなたは、あなたにとって、私は何ですか？　　……と。

……けれど、それを聞いて絶望の底に落ちたくない。

「さよなら」

そして、待ち望んだ時は思ったよりも早く訪れる。

計画の前の日、私は耐えきれなくて、うたた寝をしていた彼の頬に口付けた。そしてその余韻を残さぬまま逃げだした。……私はもう、現実は見ないと、走り出した。

けれど望んだ妄想が実現出来なかった場合、そのまま命を絶つ気だった。最後は夢の中で終わりたかったから。

私はせいっぱい身綺麗にすると、孤児院から落胆の顔で出てきた夫人の前によるよると歩いて、儂さを演じてみた。

これでもお屋敷勤めだ。宝石の少女や女中達の立ち居振る舞い、簡単な礼儀作法は知っている。私は嫌いで嫌いでしょうがない彼女の真似をしながら、夫人が興味深そうに近寄るのを待つ。

そこから夫人は私の身の上話を聞いた。

私はたった一人の身内である祖母を亡くしたことにして、同情を引きつつ嘘とばれないように、時折知的な面を見せたり、何度も練習した笑顔で見上げたりした。

結果は無事、夫人に手を引かれて馬車の中に乗り込む事が出来た

私は、妄想を実現したのだ！

ただ悔いがあるとすれば彼に会えない事、何も言わなかった事で、嫌われたらどうかと不安になる。

私は家の場所なんて誰にも言わなかったし、上司には辞めると言うてあるだけだから、私の後を知る事は無いだろう。 せめて、

彼の心の片隅で「私」が消えてしまわない事を祈るだけだ。

（待っててね、絶対会いに行くから…！）

*

それから六年。私は立派なお嬢様になっていた。

彼の目に再び留まる為に、必死になって礼儀も知識も教養も全て手に入れた。机に齧りつく反面、自分を磨くための努力も忘れなかった。彼がいつも優しく撫でつけてくれた髪は腰を越えるほどの長さになった。

夫人はそんな私を見ては満足そうだった。私は夫婦の期待に応え続けなければ面倒が無いことは当然分かっていたし、適当に謙虚で甘えることで彼らの虚しさを見えなくさせた。

そんな乾いた毎日を送っていた、ある日。
ままごとを演じ続けた私は、夫人に手を引かれて初めて舞踏会に足を踏み入れた。

薄紅のドレスに長い髪を緩い団子で結い上げた私は、夫人の傍で優しく微笑む人形であり続けた。

…… やつと解放された頃には疲れて、踊りもせずに中庭に逃げたが。

(…… 本物の舞踏会って、お伽話と違って…… キツイわ)

はあ、とため息を吐いて、噴水にそつと腰掛ける。

絹の手袋に包まれた手を伸ばして、私は夢の美しさと現実の汚さに泣きたくなった。

(あのまま、変わろうとしなかったら…… どうなっていたんだろう……)

何も言わずに置いていった祖母には、定期的に金を投げ入れておいた。捨てたようなものだけど、祖母には一応の愛があったからだ。

その祖母は昔の私のちっぴけな給金よりも多い金で薬を買ったりして、それなりに裕福に暮らしている。こっそり様子を見に行った時、私が去った寂しさは抱いていないようだった。てつきり　泣き暮らしてくれたんじゃないかって、思ったのに。

結局私は、それだけの存在だったのか。老いた自分に貢ぐだけの存在。それ以上でもそれ以下でもなく　ああ、あのままならそんな事にも気付かずにいられたのだろうか。

「ル、ト……」

救いを求めるように、掠れた声で彼の名を呼ぶ。

……あなたは今でも私の王子様だ。もう駄目だと思っても、あなたを想えば何だって出来た。……今の私は、あなたに相応しいだろうか……？あなたは、今でも私を必要としてくれるだろうか……。

返事が欲しい、と瞳を閉じれば、向こうからガサガサと音がする。

振り返れば、葉を分けて少年と青年の狭い少年が、現れた。青年に成り切れて

少年はしきりに自分の背後を気にしていて、私に気付いていない。私は眉を寄せて扇子で口元を隠した。

扇子の音に男がびくりと肩を跳ねて振り返り

「あ……」

同時に、口をぽかんと開けた。

少年は誰もいないと思っていたのに対して、私はその少年

が、私が恋した少年だったことに。

「……………」

私は頬に熱が集まるのに気付いた。

彼に会いたかった、どんな風に扱われてもいいから私を見つめて欲しかった。この六年間、あなたを忘れた日は無かった！

あの日から毎晩夢にまで見た再会に、声が出ない。

彼はあの日と変わらぬ。多少声が低いけど、柔らかさで、「こ
んばんは」と口を開く。私はどうにも声が出なくて、こくん、と頭
を下げた。

（私　私の事、覚えてるのかな。忘れないでいてくれたかな
…気付いて、くれるかな……）

期待を込めて、私は。

*

私は、久々に泣いた。

……彼は気付いてくれなかった。それとなく幼少の事を聞いても、「私」は出てこなかった。唯一の救いは、私に興味を持ってくれたことだけ。

「…に、たいっ……死んでしまいたい…ッ…！」

ああ、分かってたわよ、私が勝手に期待しただけだって。噂に飲まれて、恋に溺れた私が、今もずっと妄想を引き摺ってるだけだって！

（……彼は、「私の」王子様じゃない、のに。何で期待したの……！）

それでも。それでも、その記憶の片隅に少しでいいから私を居させて欲しかった。私を想っていて欲しかった。

「許せない…っ…ひどい…、…」

分かっているても、もはや理屈では制御できないものが私を内から焼いていく。

……しかも、聞けば彼は四年前に同じ年の令嬢と婚約したらしい
私は、この事実を知りたくなくて、故意に彼の家について何
も知らずとしなかった……そのツケか、更に涙が溢れた。

『ねえ、君の名前は？』

聞きたくない聞きたくない、知らない人を見るような彼の
目が耐えられない！

あの時、私は「内緒」と笑ったけど、本当は叫んでいた ……気
づいてよ、この髪の色で。この瞳で！この声で！……何度も何度も
叫んだ。

泣き腫らした目を擦る。食事を持って来た女中が私の惨状に驚きな
がら、白い封筒を差し出した。

(……次は、次はもしかしたら……)

私は封筒を握りしめる。皺だらけのそれは 舞踏会の誘いだ
った。

*

(幼い恋に振り回された淑女の話)

12・薔薇色淑女

今回は深い青のドレスにした。

義理の両親は私が外に興味を持った事に対し、純粹に喜んでくれるようだった。良い殿方に出会えると良いわね、と私の肩抱く夫人に、私は曖昧な微笑みを浮かべる。

私はもう、恋愛なんてごめんだと思っていた。……私の妄想が突っ走ったせいだけれど、あんな痛みはもう……経験したくない。

それでも、性懲りもなく舞踏会に出かけてあなたを探す私は、大馬鹿なのでしょうね……。

むしろ諦めが悪いのかもしれない。私はテラスでぼんやりしながら自嘲していた

「……久し振り」
「きゃあ！」

思わず手摺を強く掴む。

落ち着いた声の方へと振り向けば、隣のテラスで彼がグラスを片手に微笑んでいた。

「な、何し、て？」

「……人に、酔っちゃって」

どもりつつ聞けば、彼は遠い目でそう答える。

よく見れば顔色が悪い。グラスを持つ手も震えていて、今にも落としてしまいそうだ。

「……そっち、行っていい？」

ええ、と頷くかも分からぬうちに、彼はテラスから出ていった。その後すぐに姿を見せた彼は、気まずそうに微笑んだ。

「参ったな。本当はもう少し明るく会いたかったんだけど……」

「……いつも、こうなの？」

「そうだよ。あまり人混みは好きじゃないんだ……それに、此処に来ると緊張しちゃったり考え込んで気落ちしたりして、余計具合が……はあ、」

「無理して来なければいけないなんて、大変ですこと」

「はは、僕は普段は舞踏会になんて出ないよ」

「え　　？」

「君に、会いたくて」

会いたくて。

私に、会いたくて。

月の光に溶けそうな微笑に、私は目頭が熱くなって、誤魔化すように扇子を広げた。

「……そう」

「……そっけないなあ……」

「胡散臭いのよ。……婚約者がいるくせに、軽いこと言わないで」

「……軽くないよ」

まるで、ナイフのように切れ味の良い返事だった。

思わず目を見開けば、彼はそっと手摺に両の腕を乗せる。その指は、何の飾り気も無い。

(……指輪が、無い……?)

何かが喉をせり上がった。

私はぎゅゅと堪えるように扇子を握り、対する彼はのんびり月を見上げている。

両の手でグラスを弄る姿はやはりどこか幼いのに、指先や顔、体格を見れば立派な青年であるその差に、妙な色気があった。

「僕、流されてばかりなんだ」

「……え？」

「抗うのが嫌で、ずっと流れてた。そうすれば不安な事なんてない……でも、一度だけ抗った事がある」

「……」

「でもね　　変われなかったよ……ずっと、甘ったれてた。……逃げてばかりで、選べなかった。切り捨てられなかったんだ」

「…そう」
「そんな自分が嫌でね。ある日僕は…一つだけ、一つだけ、決めたんだ」

何を？と首を傾げると、彼はグラスを手摺に置いて私を見つめた

何処か、怖かった。

「いつか…今度こそ、自分に正直に生きると決めた時は」

そっと、私を抱きしめて。

唇に指を這わせて、驚いてグラスと扇子を叩き落した私に微笑んだ。

「……………」

私は逃れるように、落ちていったグラスと扇子を見遣る。夜に飲まれたそれらは、まるで私達のようにだと、瞳を閉じた。

*

それから。

それから私は、彼と逢瀬を重ねた。

不倫と言うには色が無く、友人同士の席と言うよりは甘すぎたその時間。彼は、私に会う時は婚約指輪を嵌めずに、出会い頭に首にキスをする。

そのまま何事も無かったように席に着いて、他愛もない会話をした。名前を呼び交わさずに一緒に時を数えるのは……少し奇妙だった。

(まるで、意地の張り合いのよう)

強く抱きしめられて、私はゆっくりと目を閉じる。彼の優しい香りに包まれて、幸せだった。きつと、幸せ……だった。

……ただ、それと同じくらい……苦しかった。

逃れるように瞳を開けば、彼が優しく見つめている。

「何か、欲しい物とか……望みはないかな？」と囁く彼に、私はいつだって「何も」と答えた。……それ以外の答えは、この唇が許さない。

(子供の頃とは、何もかも違ってくるのね……今の私は、)

欲深になった。堅くなった。手に入れば手に入れるほど欲しいと願う自分が汚らしく、臆病になった自分が疎ましい。

歳経た私は、彼を想えば想うほどにこの関係が続けてはならないと思う。離れるべきだったと、そもそも養子になる以前から私は行動に移すべきではなかったと気付いた。

良識に縛られて、幼い頃の私がどんなに叫んだって、今の私は応える事が出来ない。彼に見合う女性になりたくて、教養高い淑女になろうと努力した……その結果がこれなのだ。

最後に、結末を教えてあげる。

私は結局、彼の腕を掴まなかった。だけどずると彼に寄り添った。温かさと冷めた何かが私の胸で荒れる頃に、彼が結婚することになった。

その報を聞いた時にはもう、お互い会える事が出来なくて。面倒を嫌った両家は私達を軟禁した。

祝福された教会で、花嫁のヴェールを捲る時、彼と私は目が合った。

その時の彼がどんな顔だったかは覚えていない。涙で視界は揺れ、吐き気でまともに考えられなかった。

「……それで、私の所に来たと？」

「昔、聞いたのよ。此処の店主は魔法使いだって」

私が擦り切れた半生を語り終わると、見てくれが好々爺の店主は優しく微笑んだ。

「なるほど、それで貴女は 何を願うんだい？」

「彼が欲しいの」

切羽詰まった声に、我ながら思わず笑ってしまう。

もうどうなってもかまわない。教会で微笑む二人を見た時から、とうに理性も良識も死んでしまった。あるのは嫌悪と憎悪と殺意と、それを上回る恋慕だけ。

「何だって捧げるわ 何だってやり遂げて見せる。だから、私の願いを聞いて欲しい」

「……ふむ、資格は御有りのようだ」

短く笑うと、店主は深緑の分厚い本を差し出す。

それをそっと受け取って表紙を見る 題名は、書いて無い。

恐る恐る開いてみるとやけに物騒な童話が書かれていて、私は一度本を閉じてしまう。目でこれは何なのかと訴えれば、店主は煙管に手を伸ばしてのんびりと答えた。

「愛する二人の為の世界だとも」

「…世界？」

「この本を彼に読ませて差し上げなさい。一行でも良いから読ませた後、中にある栞を彼はきつと触るだろう。そしてその栞は見かけによらず良く切れるものだから、血が飛ぶだろうね」

「…そしたら、この本の中…世界に、行けるとでも？」

「おうとも。やがて彼は倒れ、眠りに着く。貴女は心の準備が決まり次第、貴女の愛する人をその手にかけなさい。その人の犠牲で貴女は彼と共にこの『本の世界』に行ける」

ただし、向こうに着く時間帯は人によってバラバラなのだけどねえ、と店主は煙を吐きだした。

「そ、そしたら私は 彼と一緒に…？」

「なれる……が、彼が帰りたいと思えば帰れるのだよ、…貴女を置いて」

「え」

「しかし彼が帰れないようにする方法もある。その為に、貴女は自分の手を汚せるかい？」

「……ええ、勿論」

渡された本は、重石でも乗っているかのようだった。

『……来てくれたんだね』
『え、祝いの品　　？……そう、…ありがとう』
『ちよつと、嫌がらせかい？怖い童話じゃないか』
『わあ、綺麗な栞……痛っ』

「　　ごめんね」

激しい雨の中、ずぶ濡れで私は空を仰ぐ。

……彼は昨日、『眠り』についた。後は私だけ。私が覚悟を決めるだけ。私は懐かしい我が家に足を踏み入れた。

「お、お前…生きてたのかい!？」

少し太った祖母が、私によるよると近寄る。
目に涙を浮かべているけれど、私は何とも思わない。祖母だって、内心では何を考えている事やら。
私がゆつくりと唇を笑みに変えると、祖母は私に抱きつこうと両手を広げた。

私は懐からナイフを取り出し　　。

「ごめんね、抱きつかないで。…彼に抱かれた記憶が薄れて
しまいそうで、怖い」

思い出す。今までに無いくらい　熱い抱擁を。震えたその身
からはは変わらぬ優しい香りがしてた。…ああ、彼の熱い腕が名
残惜しくて仕方ない。

「……口……ぜ、」

祖母はパクパクと口を動かし、やがて目を閉じる。

可哀想だとは思いつけど、でもどうせ余命も短いのだし、愛する孫に
看取られて死ぬのも幸せじゃないかな、とも思った。

多めの金を送ったから、その分楽しい余生を過ごしただろう。

私はナイフを落とし、置いていた本を持ち上げると、表紙に口付け
た。瞳を閉じ　また開ける頃には、私はもう、元の世界にはい
ない。

彼が堕ち、私が望んだ世界の名前は『カラヒツギハカバ空棺墓場』。

そこは、歪んだ愛すら許される世界。

*

(そして私は『お菓子の家の魔女』になり、
彼が迷い込むのを待ち
続けた)

12・薔薇色淑女（後書き）

薔薇色淑女ロゼの回想終了です。

13・動きだす

朝に飲んだ薬のおかげで、一時的に熱が下がってきたわ。

陽が傾き、少しだけ熱も落ち着いてきたけど、今度は淀んだこの空気に耐えられない。何度もよるめきながら、私は近くの窓を開けようと手を伸ばし

「……え、」

する、と開け放たれた窓から指輪が転がり落ちる。

元々サイズがちょっと大きかったそれは、汗を掻いたこの手から、夕日の光によって綺麗な尾を引いて落ちて行く。

待って、と思わず身を乗り出し、ぐらりと落ちそうになった瞬間
ぐいつと服の裾を引っ張られた。

「何やっているんだ君は!？」

振り向いた瞬間、ローラントが吠えて牙を見せる。

焦っている私は何も言わずに髪を乱したままローラントを避けて部屋から出ようとすするも、ローラントは素早く道を塞いでしまう。
私は苛々しながら「そこを退いて」と刺々しい声を出した。

「君は病人なんだぞ！？外に出て悪化したらどうする！」

「すぐに戻るわよ！…早く退いて、陽が沈んだら見つけられない…」

「」

「見つける…？何か落としたのか？」

「指輪」

「馬鹿か君は！」

彼が人間であつたのなら手を上げられていたのだろうけど　　彼は、手の代わりに頭を突っ込んで来た。

それは見事に私の額に当たり…そのせいで舞う彼の体毛によって、私は咳込んだ。

ぎゃーぎゃーわーわー、げげほと騒がしい私達の部屋に気付いたロゼ（何故かいつもより怖い）によって、彼と仲良く怒られ、こっそり覗いていたヘンゼルにくすつと笑われた。

それが一時間前。

この部屋にローラントはいない。

薬で体調は良くなったけれど頭の中は指輪しかない私と、機嫌の悪い（私のせいだけど）ローラントは怒られた後も喧嘩腰になつてしまつので、ロゼが無言でローラントを引き摺って行った。

流石に今では私も落ち着いてきて

何だか居心地が悪い。

彼に嫌われたかな、と思うと胸が苦しく、指輪を探しに行くと言ってくれたヘンゼルにオドオドと彼の事を聞いてみたら彼は今家に居ないらしい。……もう暗いのに。不良だ。

案外ヘンゼルの「狂犬」発言も嘘ではないかも思ってた頃には、ヘンゼルはしょぼんとした顔で謝ってきた
指輪は、見つからなかった。

思わずボロつと涙が溢れそうになって、私は無理やり笑って「ありがとう」と彼を労い、申し訳なさそうに彼が扉を閉めた瞬間にやつと涙を零せた。

(碧から貰ったものだったのに……！)

ああ私の馬鹿馬鹿！何で寝込んでいる時まで指輪を付けてるのよ！何でそのまま窓を開けるのよ！……顔を覆いながら、私は私を詰る。

私が今まで大事に大事に、肌身離さず身に着けていた、それ。学校帰りに骨董屋で見つけて、買って貰った物。

セピアゴールドに薔薇が咲いていて、それでいて派手じゃない。そんな外見のせいで高値の物に見えるのに、値札を見れば案外安く、少し痛んだそれを摘みながら、私は一目惚れした、と笑って店主の元に駆け寄った。財布からお金を引っ張り出すのと同時に、机の上にはお金が乗ってて、碧がプレゼントだと悪戯っぽく笑ってて。

結局彼は私のお金を断ってしまい、私は困ったのと照れ隠

しの両方の意味でおねだりした。手を痛めてるから代わりに嵌めて、と。

彼は疑いもせず了承して、私が差し出した薬指に

『……………え？』

『こ、この指で、いいの？』

『あ、いや、いやいや何でもない！』

わたわたしながら、そつと嵌めてくれた。

それ以来、あまり装飾品は好きじゃない私の指を飾り続けたそれ。買ってもらって初めての休日であー、うたた寝をしていたら腕にキ……………色々あったわけだけど。

記憶の中では、彼は起きたと思って距離を開けた後、そろそろ手を取って、指輪にキ…スをした。ロマンティストな彼の一面に引いたというか吃驚したというか…うん。

髪飾りの王冠だって彼からの誕生日プレゼントだ。私用で夜に渡しに来てくれて…その旨を伝える留守電は、今でも残っている。

「……………はあ、」

もう一度窓を見遣る。まだ空には赤みが残っている

ん？

(ロゼ…と誰か…？何してるんだろ…あれ、)

ロゼと知らぬ誰かから離れた所で、ヘンゼルが静かに彼女達を見つめている。

頻りに空を見上げ、手元を弄り、最後は大きく深呼吸をしていた。胸元を掴んでいた手をゆっくり離すと　　今度は、ローラント？

不意に現れたローラントがヘンゼルに何事かを告げる。ヘンゼルも何かを返す。そして彼はふいっとロゼの後を追う。……その際に見えた顔は、夕日に照らされて赤く、…笑みを浮かべていた。

思わずゾツとした私。急いで顔を引っ込めようと思ったのだけど

…一瞬、草むらで金の光が走った。

(指輪…！)

……かも、しれない、だが。

今の私は　　後から思い出すとだいぶおかしかった。熱と指輪を無くしてしまふ不安からのものだろうけど…。私の知らない所で何かが起こる予感を察していたのに、……私は。

服を着替えた。今だ身体は熱いから、ポンチヨは置いていった。髪留めも一緒だ。ちょっと出かけるだけだから、明りも持たずに部屋を出る。

階段をよるめきながら降りる私は、この後ローラントと大喧嘩になるとは……思っていなかった。

*

(懐かしい夢から覚めた彼女は、思わず顔を両の手で覆いました。)

嗚呼　　私は、ずっと逃げてた。

彼女のせいで何度も死にかけた。飢えそうになった、心が凍りついた事だつて……だから、きつと彼女を殺す事は何の躊躇いも無いと思っていた。

あの日、祖母だつて簡単に手にかけて　　けど、あれは一時の、異様な熱があつたからこそ、出来た事だつたのだ。落ち着いてから、私は自分の恐ろしさに、それでも魔女らしさを取り繕わねばやっていけない自分に殺されそうになっている。……そんな私に、あともう一人、だなんて。

震える私がこの世界に来てから最初にした事　　それは、償いだ。そして、祖母の死を無駄にしない事……つまり、最後までやり通すこと。そしてそれを後悔しながら生きていくこと。

償いは……我ながら安直だけれど、近くの孤児院や教会に薬草や薬を無償で贈っていること。

魔女の作った薬は効果靨面で、今年は十人程、私は救えたらしい。

新しい人生で誰かを癒すこと。勝手な、私なりの贖罪は……心が死んでしまわない為の、処置かもしれないと、最近思う。

(また、十字架が増えるわね……)

包丁を見つめる。私は、これから あの子を。殺す。物語はこれでお終いよ。

目を閉じればさっきまで見ていた懐かしい夢を思い出す。彼の切なげな瞳を思い出す。……さっき、彼がうたた寝をしていた私の唇を、柔らかく奪っていった事を、思い出す。

「……愛してるよ、ロゼ」……小さく愛しさを込めた囁きが、私の後押しだったのかもしれない。

私は立ち上がると、剥き出しの包丁を布で包んだ。

魔女のくせに魔法で殺さないのか、って言われそうだけど、これは予防策。

空棺墓場の物語は他の童話と少し違う。……と、あの店主は言っていた……つまり、本を読んでいない私の行動の一つは、もし

かしたらあの「本」に書かれた通りかもしれない。本の通りにはならないだけに、下手な手は打てないのだ。

王道の釜戸に放り込むのも危険性が高いから却下だした末に、私は「来なさい」と扉に向かって声をかけた。

悩ん

現れたのは、老婆。

パンで人型に捏ねた彼女は私の使い魔。

別に老婆でなくても良かったのだけど……最初の頃に、もしかしたらあの子が襲ってくるかもしれない事を考えてのカモフラージュに、老婆を創った。

……誰も【老婆の孫娘】が【お菓子の家の魔女】なんて思わないでしょう？

それにしても、あの子が暖炉に押し倒してきた時はヒヤッとしたわ。思わず素を出しちゃったし。ああ、現実逃避もここまでね。

…もうすぐ日が沈むわ。急がないと。

「この包丁で、あの子を殺しなさい。いいわね？」

「……はい」

油の切れかかった機械人形のような老婆を連れ立って、私は外へ

あの子の元へ、足を踏み出した。

（窓の上からお姫様が見ているのも気付かず、彼らは魔女の背を見つめました。）

「君は、助けはないのか」

「うん」

「見捨てるん？」

「そっだよ」

「…帰ると、言っていたじゃないか」

「妹が、帰りがついていると言っただけだよ」

「……………」

「…正直な話、僕の自由はね、妹に奪われたようなものなんだ」

「え？」

「妹以外と遊んでいれば親に泣きついて叱られたし、恋した人には余計な事を言っつて僕の元から去らせた。あの結婚式の準備中だって、妹が僕の親に余計な事を言わなければ、僕は、きつと…」

「……………憎んでいるのか？」

「ああ、恐らくね。…………まあ、受け身だった僕が悪いんだけど。でも、あの子も僕を『こうさせた』一因だから、情なんて沸かないのさ。正直、天罰かなんかが下ったんだろっと思わないよ」

「……………」

「じゃあ、僕は行くよ。今度は逃がさない為に、ね」

ヘンゼルは純粹な狼に微笑むと、彼女の後を追って行った。

*

(物語が終わりにさしかかりました)

13・動きだす（後書き）

今回も散文で申し訳ありません。

補足ですが、白雪が頭悪い言動しているのは風邪のせい、ロゼが絶賛後悔中なのは「薔薇色」を夢として見た後だからです。

ローラントがカリカリしてるのは次回明らかになります。

14 ジュ・トゥ・ヴ

時は、彼女が【お菓子の家】で目覚めた時に戻る。

空は夕暮れ。林檎のように熟れたその色が部屋に満ちて、二人の姿は影絵のように部屋に描かれる。

「ん、っ、けほ」

「白雪、もつとゆっくり飲んでもいいんだよ？」

そんな【お菓子の家】の二階。ロゼに貸し与えられた部屋で、ロラントは尻尾をゆるやかに振っていた。

彼の視線の先で小さく咽る少女はベッドから上半身を起こし、何とかドロリとした薬を飲み干した。そのコップを盆に戻しながら、外見を裏切らない苦さに思わず舌をちよろっと出す。

「…だって、苦いのは嫌いなんだもの」

「急いで飲んでも変わらないと思うよ」

「気持ちの問題よ」

戻したコップの隣、口直しにと置かれた水をゆっくり飲むと、白雪

はベッドの端に顎を乗せるローラントの頭を撫でる。

「もふもふだわ」と耳の後ろを搔くように撫でて、もう一度水を飲んでから盆に戻した。

「じゃあ、お願いね」

「うん」

ローラントの上に恐る恐る乗せられたそれは、意外な安定感があった。

「布団に潜ってるんだよ」とローラントが言い聞かせて扉へと歩いても落ちる気配を見せず、白雪が「気を付けてね」と手を振るのに彼が振り返っても落ちなかったという、謎の安定力である。

白雪はとてとて可愛らしい足音をたてる彼の姿が消えると手を下ろし、段々と黒の混じってきた空を見上げて、ぼつりと零した。

「私、なんで三日間も眠っていたのかしら…」

*

なんて二人でほのぼのとしていたのも懐かしい。

「ローラントの、馬鹿っ」

ここ最近、というか【お菓子の家】に来てから、白雪との仲が悪くなってしまった。

ローラントは全力でタオルを投げつけた白雪を見上げる。尻尾も耳もぺたんと垂れさせて、彼は今更ながらにそう、気付いたのだった。どう弁明しようかと口籠り、ずるりとタオルが落ちる頃には彼女は背を向けてしまう。

（しょうがないじゃないか）

白雪が三日間の眠りについた頃から始めていた【お菓子の家】付近の巡回。

ずっと巡回しては近くをうろつく野犬や継母の追っ手を蹴散らしているのだ、なんて言えば彼女は自分も手伝うと言いだすに決まっている。

『彼女を死なせたくなかったら、【力】を使わせ過ぎないことね』

二日目の夜、眠りから覚めない白雪の手をとりながら【お菓子の家の魔女】は言った。

連戦を乗り越えるのは。未だ【力】を扱いきれていない彼女が闇雲にその力を振りかざすのは　　きつと、身体が持たない。

病弱な身が平気で走り回り、重い物を持ち、精神を平常通り保たせているなんて、想像以上に【力】がいるのだと。……そう諭した魔女に、ローラントは震えてしまった。

『彼女はもう、【物語】から外れてしまったのでしょうか？…いくら【主人公】でも、【物語】から外れば死ぬ事だってあるのよ』

この眠りは、『今までの』反動よ。死ななくてもこうしてずっと、眠り続ける場合もあるの。

そつと手を置いて、魔女は伏目になったローラントを一瞥した。魔女は小さく息を吐くと、彼に救いを与えた。

それは同時に自分を救いあげる為の行為からくるものだけれど、ローラントは勿論そんな魔女の贖罪行為なんて知らないものだから、彼女の気まぐれだと思った。

『明日には目覚めるように、無理矢理眠りの国から連れて来てあげる。でもね、本当は休まなければならぬ身体を酷使するわけだから　分かってるわよね？』

『一旦彼女は向こうの世界と同じく、病弱な少女に戻る。時間が彼女を癒すまで、あなたは一人で彼女を守りなさい。この家に居る限り、彼女は私の庇護の下にある』

外の敵はお前が払えと、彼女を外に出さないように言い包めておくと、魔女はそう言って懐を探った。

取り出したのは石榴色の薬。甘酸っぱい香りがほのかにするそれを、薄く開いた少女の口に落とす。

一滴、もう一滴。少女は無意識にそれを飲み込んだ。

やがてその雫は彼女の身体を巡り、黄昏時に彼女は目を覚ます。

【お菓子の家】の中で、安全な殻の中で彼女は雨の向こうを見、彼は殻の外で害虫駆除に時間を費やした。

擦り減っていく日々を過ごし、気付けばいつの間にか、彼女との会話も少なくなり　今、彼女が離れていこうと背を向けて、その一歩を踏み出した。

けれども彼女は彼の予想を裏切って、そのまま去らずに、もう一度彼の本音を待って肩越しに振り返った。

(ああ　君のそういう所に、救われる)

きつと、彼女からしたら未練たらしく、彼からしたら優しさからのチャンス。でも、何て言いだせばいいのだろう。

「……ただ、此処に居たくないだけだよ」

彼女の優しさに報いようと、半分本当の事を告げた。

外で君の首を狙う奴がうろついているのに、悠々と君の傍にはいないのだと。君を守る事で誤魔化したいのだと。そんな含みを持たせた言葉に、彼女は眉を寄せた。

じゃあ私も居たくない。一緒について行く。…彼女の言葉に、ローラントは思わず声を荒げて駄目だと言いつつ放った。

いつも穏やかに話しかけてくる彼の変わりようか、拒否の言葉が癪に障ったのか、彼女は口をきゅ、と一文字にして、今度こそローラントに背を向けて、去ってしまった。

？

「ふ、ははははっ」

「……笑うな」

「だって、仲直りの仕方って…！」

「……」

「はは　や、ごめんごめん。だって君、僕の話ロゼットのノロケを洗い顔して聞

いたたものだから、きつとそういう方面で困っても相談して来ない
だろうなって思ってたんだ」

「あれは呆れてたんだ」

「ええー？どこに呆れる要素があるんだい？可愛いんだよ、彼女。
偶に妹の話を振った時の顔とかね」

「君は最低の屑で鬼畜で畜生だな」

「そんな謂われをされるくらいならサディストって素直に言って欲
しいな」

聞く相手を間違えた、とヘンゼルに背を向けると、彼は去ろうとす
る狼の名前を呼んだ。

「もういつそ、素直に本当の事を話したらどうだい？」

「それでどうする。白雪はきつと自粛しない」

「言わなくても、そうじゃない？」

「……………」

「ね、君ってまるで、白雪さんが何も出来ないと思っ込んでる
けど、実際君の助けって、要らないんじゃないかなあ？」

「……………」

「ちよつと、唸らないでくれる？……………だつて君だつて、『自粛しな
い』って分かつているんだろう？つまりさ、君の忠告コトバなんてその程
度なんだよ。番犬キは騎士にも王子にもなれない
裏側がドロ

ドロしてれば余計にね」

「……………うるさい」

「君がどんなに彼女を大事に想つても、彼女はそもそも自分に興味
がないんじゃないかな、どうでもいいんじゃないかな？…それって、
君の事も軽んじてるよね
いや、軽んじているんだよ、無意識
に」

「うるさいッ！」

薬草を摘む彼の背に吠えると、ローラントは木々の合間から見える【お菓子の家】に目を走らせた。

白雪は今、具合を悪くして眠っている。

急に震えだして、呼吸を乱して……ストレスが原因の風邪だと、無理矢理『目覚めさせた』反動から、病弱に戻った彼女の免疫が下がったせいだと言われた。

暗に自分のせいと言われているのに、ローラントは黙って頂垂れていた。自分は　彼女にとって、さして重要ではない所か、

(苦しめることしか出来ない……！)

ああ苛々する。駄目な自分に苛々する。セピア色の薔薇の指輪を懐かしむように、淡い微笑を浮かべて撫でる彼女が見てられない。君が描く指輪の贈り主に、自分はなれない　。

凶悪な顔を下げたまま薬草を持ちかえり、彼女の様子を見に行つた。彼女は窓から身を乗り出して、急いで止めて話を聞けば「指輪を落とした」と顔色が悪いのに退けとせつつく。

(指輪が
るものか！)

あんな安物が、君の身を危険に晒す程の価値があ

…でも言わない。もしそう吐き捨てれば、彼女はきつと嫌いになる。
侮蔑の目で射抜くかもしれない。それは駄目なのだ。耐えられない。

だから自棄になつて森に駆けだした。暴言の代わりに牙を
振りかざし、爪で切り裂いた。

暴れて暴れて、落ち着いた頃はもう星が見えそうな空で。とぼとぼ
と熱くなつた身体を冷やしていたら、微かにペラリとページをめく
る音が頭に響く。

(これは

【物語】が、動き始めた…?)

つまり今、【お菓子の家の魔女^{ロゼ}】は【物語】通りに全てを終わらせ
ようとしている。確か彼女は【物語】を壊すと言っていたから、…
…失敗、か。

(多分ロゼ自身、手探りだろうし……物語らしかぬ殺し方を選ぶ筈
だ。まだ選択の余地はある)

白雪の安全の為に、【お菓子の家の魔女】が殺されるなんて事にな
つたら不味い。彼女の匂いを追って走ると、木の陰に隠れるように

ヘンゼルがロゼを見つめていた。

「やあ」

片手を上げる彼はこれからの惨劇など知らぬとばかりに、平時と同じ穏やかな微笑を浮かべている。

そのまま緊張感の無い彼と、短い会話を交わした。

彼の一端を知ったローラントが余計に眉を寄せると、ヘンゼルは微笑みと共に去っていく。フードを被った魔女の背を、追いかけて消えていく。

「ロゼも……運が悪いな」

何となくヘンゼルが仕出かそうとしている事が薄らぼんやりと分かったローラントは【ヘンゼルとグレーテル】の『劇場』に一瞥をくると、そのままもう一度森の中に戻る。

継母からの追っ手が、『沸いて』出たのを察知した。

…今、此処はだいぶ揺れている。

【物語】が完成されるのか失敗するのか分からないが故に、【お菓子の家】の周りの守りは陽炎のように揺らいでいる。

しかしまあよく持ったものだ。魔法薬と使い魔^{パン}ぐらいが得意な魔女が、外道のような魔女の魔力に、ここまで抗うとは。

継母の圧力に対する修正、つまり世界からロゼへの助力があったとはいえ、本当に大したものだ。
おかげで数々の力から抜け出してきた追っ手を、容易く倒せてきた。これから迫り来るだろう強敵ぐらいは、全力で倒そう。

そう、思っていたのに。

*

白雪は、とても無謀な少女だ。

無謀で、とても優しい。…だから、聞いた事も無い唸り声を聞いて、クロスボウを握って森に入ってしまう。

上着は着ていない。指輪はポケットの中に入れた。薬が切れそうだからか少し熱っぽくて眠くても、彼女はローラントの無事を祈って声の先を探った。

例え不満と喧嘩中の相手でも、ローラントは彼女にとって恩人で旅の仲間なのだ。： 恥ずかしいので、「飼い主だもの」と隠したが。

きつと過保護なローラントは怒るだろうとは思いつけど、クロスボウならそこまで危険度は高くないと彼女なりに考えたのだ。パツと倒してパツと帰ろう　　心労で彼が倒れられたら困るし。

： そろそろと森の奥へと踏み入りながら、白雪は静かに矢を装填して耳を澄ませた。

パキンと枝を折る音とか荒い息が聞こえて、彼女は身を低くして標的が見える所まで進む。すると黒い尻尾が木の陰から見えて、彼女は心配していた彼だと思って安心して近寄った。

「ローラン、……と？」

あれ？……ない？

………無い。

身体の半分が、…無い。

「……………ッ」

白雪は悲鳴を飲み込んだ。…大丈夫、小人の遺体でもう慣れただろうと、道中の戦闘で見慣れただろうと必死に言い聞かせた。それでも耐えきれなくて両の手で塞ごうとして、がたんとクロスボウが手から滑り落ちた。

「……………う…」

落ち着いて、落ち着くのを白雪。断面が見えないだけ、まだマシ。虫が沸いてて悪臭も微かにするから、きつとこれはローラントじゃない。ローラントはいつだって花か石鹸の香りがする。毎日身体を洗ってあげてるし毛を梳いてあげてるから、……………こんな汚い死体、彼じゃない、よ。……………きつと。

(寒い……………)

上着を持ってくればよかった。ローラントがいたら抱きついて暖をとったのに。段々現実逃避に走りだした白雪は、不意に視線を感じて上を見上げた。

まるで死体を優しく照らすかのように、木々の隙間から見える、幾数もの星々。……………星、々？

「め、…だ あ」

夜空は震えた私の前で大口を開く。ねったりとした、錆びついた微風が、頬を撫でて、

パン

自分でもびっくりの早業で、夜空を射抜いた。

だけどいつもと勝手が違って、身体は放った衝撃に耐えられなくて尻餅をつく。

それでも、震えながら腰の矢筒から矢を取って装填しようと構えた。身構えた私の視線の先 夜空には矢が一本、宙で止まっている。

(…貫通、してない)

強く光りを放つ一等星を狙えば、周囲の星々は彗星のような速さで目当ての星に集まり、まるで冷えた月のように彼女を見据えた。

夜はずるりと、気押されている白雪に気付かれぬように手を伸ばし

気を取り直した白雪が月を撃った瞬間、それは彼女の細い腕を噛み千切ろうと迫る。

悪臭でやっと白雪が彼の腕に気付いた頃にはもう遅く、彼女がどう対処しても、動きだした頃には彼女の腕は食べられる。

(この腕は)

碧が、口付けてくれた、腕なのに。

また、彼との繋がりが消える。

そう思うと、大きな瞳から涙が零れて、空に散った。怨敵の歯が彼女の腕に吸い込まれるように閉じる、その手前で

がさがさがさ、がさ、ぞぞっ

茨を飛び越え、白い花弁を彼女の涙のように散らせて、彼女の番犬ナイトが月に食ってかかった。∴文字通り、月を食い破って真っ赤に染めた。

彼の乱入によって白雪の腕は無事…とは言い難いものの、布と少しばかりの血が出た程度で済んだ。

「ローラント……！」

唸り声を上げて注意を引きつける彼の名を呼んで、立ち上がるように身体を起こした途端、彼女は糸の切れた人形のようにもう一度大地に落ちた。

急にひどく怠くて眠くなって、白雪は訳が分からなくて瞬きを繰り返す。

対してローラントは倒れた彼女の状態がすぐに分かった。

『力の反動』だ。

ロゼ曰く白雪に投与された薬は持ちが良くない。副作用が無い代わりに、切れた瞬間今までの溜まったそれが一気に押し寄せてしまう。

ローラントは半透明の、夜に染みだした敵の星目掛けて爪を振り下ろした。

ぶに、とした弾力の後にぶちゅ、と潰れる感触　白雪の放った矢のように埋もれそうになって、ローラントは【力】を行使して勢いよく切り裂いた。

白雪の目からは、青い陽炎のような光が銀の細い線に纏わりつくように夜を引き裂いたように見える。

「……綺麗」

悪臭と死体と幾数の目がある化け物がある世界で、ローラントは何よりも勇ましくて　　美しい。

「……………あ？」

ローラントが振り向くよりも前だった。

急に白雪の視界は黒の半透明に染まり、彼の名前を呼ぼうとして、少し粘っこい水の中に居る事に気付く。

「……………」

夜空は【力】の尽きた白雪に手を伸ばし、ローラントを怯ませたのだ。

ローラントが何かパクパクと口を忙しく動かしているのを見て、口を手を当てていた白雪は不意に、するすると足下に絡みつくモノを見てしまった。

ずるり、ずるりと巻きつくのは　　幾数もの、薄紫の可愛いお花。

(これ、知ってる…昔、お父さんとお母さんと、何処かの花園で、退院祝いに連れてってもらった　　)

その名は松虫草、スカビオサ。そしてお母さんが教えてくれた花言葉
あぁ、思えばあれが、お母さんの『本当』を知った日。

悲しい花言葉だった。怖い目だった。でも、それでもお母さんが好きだった。

『 わたしは、すべてをうしなった』

小さく、母と同じように、花の意味を呟く。唱える。転がしてみる。

? 私は全てを失った。そして奪ったのは……。?

だあれ?、と母が笑うのが、とてもとても恐ろしかったのよ。

*

(ジュ・トゥ・ヴ 貴方が欲しい)

15・二つだけ、決めていた。(前書き)

甘い半分、血表現が半分の話ですのでご注意ください。

15・一つだけ、決めていた。

彼と彼女の自己紹介

そうねえ　　一般的な『ヘンゼルとグレーテル』のお話を、あ
らすじ程度に話して差し上げましょうか。

継母によつて森に捨てられた「ヘンゼル」と「グレーテル」という
兄妹は何度か兄の知恵で家に戻るのだけど、三度目の時に帰れなく
なつてしまった。

兄妹は不安を抱きながら暗い暗い森の中を進み、その奥でとっても
美味しそうな『お菓子の家』を見つけて、お腹が空いていた二人は
その家を食べ始めるの。…鼠のようにね。

その途中、兄妹は家主のお婆さんに家に招き入れられ、食事を振舞
われた。お腹一杯でぐっすり寝た後、兄妹は引き裂かれてしまった
兄は監禁、妹は魔女の言いつけ通り働いたの。

でも兄は賢かったから、太らせようとする魔女を騙した。
そして物語の最後は妹による魔女殺し、家中荒探しして宝石や金貨
を手に、意気揚々と我が家に帰った……。

ある意味、この兄妹の方が魔女かもしれないわね。

勝手に人様の家に齧りついて、魔女を丸焼きにしちゃうのだから

え？人食い魔女なんて殺されて当然？

…どうかしらね。私達だって、生きる為に動物を食べているじゃない。魔女にとつての動物が、あの兄妹だっただけよ。……て、【お菓子の家の魔女】としては思うわけ。

まあ、生きるか死ぬかの世界でそんな事言っつてられないのでしょうけど…。

さて、じゃあ空棺墓場による『ヘンゼルとグレーテル』の話に進むわ。

彼ら兄妹は【読者】と【生贄】。不思議な不思議な本を読み、棗で血を流した【読者】はね、近親者を伴ってこの世界に渡るの。

この『行き』があるなら『帰り』もなければならぬから、帰りの片道切符として【生贄】が必要なのよ。この片道切符を消費イケニエすれば、【読者】は元居た世界に帰れる。…ちなみに、これは【生贄】役にも言えることなの。

対して私達【加害者】 【魔法使い】とも呼ぶらしいけど、に、その切符はない。此処にきたら最後、帰れないのよ。

だけどその代わりに【読者】（私はむしろ『被害者』って呼ぶのが正しいんじゃないか、て思うわ）と違って、最初の時点で選択の猶予が与えられるの。

【加害者】側の【生贄】を殺すか、否か。殺さなければ【加害者】

は空棺墓場には行かなくて済む。

でもそうになると、その【物語】は止まってしまふ。代役が現れれば動きだすらしいけど…。

案外そういう物語が多いらしいわ。だから空棺墓場に元々いた人達は代役になりたくて動きの止まった【物語】に近寄るの。特に王子様お姫様の【物語】は大人気！だって滞りなく上手く進めば、約束された幸せが待っているのだからね。 … ああ、話が逸れたわね。ごめんなさい。

空棺墓場は歪んだ世界。最初に上げた物語とは違う、血生臭い話になつたり喜劇になつたり悲劇になつたり… 兎にも角にも滅茶苦茶なの。

それは「物語通りに進めたくない」「【加害者】の一部からしたら困つた話でね？ 私達【加害者】は【読者】に読ませた例の本の本身、分からないのよ。

だって本はただの異界に行ける扉のようなものだと思つてたし、本に内包された話通りに進むなんて思いつかないわ。… というか、気が急いでる時に、まともな思考能力を期待しないで欲しいわ、まったく。

それで、しょうがないから私達【加害者】は元の童話と正反対の事をするか、物語らしかぬことをしたりするの。そうすることで何か一つでも引つ掛ければ御の字だわ。

… ああ、他にも【加害者】や魔女が【被害者】の名を教えるというのもアリよ。

ただそうすると、名前の他にも過去を「全部」思い出しちゃうの。
ええ、全部よ全部 手に入れる為にハメたのも、バレちゃうわ
け。

だから名前シメンツを教えるのも考えもの。【物語】を変える程度なら、記
憶も戻らないしね。

私？…私は勿論、名前なんて教えてないわ。もし教えたら
どうなるかなんて、分かり切った事じゃない。

あなたは良いわよね、こんな気持ち、きつと分からないんだわ。
…いいえ、分からないのよ。だってあなたは本当は、彼女が受け入
れてくれると信じて疑っていないのだから。

*

いいわよね。ああ本当にいいわよね。

……私はあの狼を見るととても苛々する。それと同時に憐れみもす
る。

彼は否定しつつもその裏、彼の気付かぬ所で「絶対の自信」がある事に気付いていない。それが否定された時、彼はどんな凶行に出るのだろうと思うと、可笑しいようなぞつとするような、不思議な心持になる。

…彼も、いつかこうして濡れ鼠になるのかしら。逃げられないようにマントを踏まれて、反撃の武器すら奪われ、こうして刃を向けられるのかしら……。

私は冷えた息を吐きながら、夕日を背に立つ恋した人を見上げた。

というか、見上げるぐらいしか出来る事が無かった。

……あともう少しだったのだ。鍵を開け、閉じ込めたグレーテルを殺す。その最初の所で、愛している人に、グレーテルの兄に呼びとめられたら。誰だつて、凍りついて次の手が浮かばないでしよう？

彼には睡眠薬入りの紅茶を飲ませたのに。どうして今此処にとか、これから起きるだろう暴行に怯えるだとか、そんな事よりも前に、この恋が終わってしまった事が悲しくて苦しい。

(もう、どうしようも、ない。どうしようとも、思わない)

それだけ、今の自分には全てが億劫だった。

髪飾りが解けてぐしゃぐしゃになった髪から水が滴り、どんどん私の体力を奪う事も。その横で、私の使い魔である老婆は水を受けて

べちゃべちゃしたパン生地に変わり果ててしまった事も。もう、どうでもいい。

「……………ロゼ」

静かに、少し震えた声で彼は私の名前を呼ぶ。

私はのろのと唇を開けて、やがて何の音を発する事も無く閉じた。彼の声音は何の感情も見せないから、どう口火を切れればいいのかわからない。

「……………寒いかな？」

急に近寄って私の傍に膝を折り、ビクついた私のマントを剥いで自分の上着をかけてくれた。マントの下は黒いドレスを着ていたから、彼の優しい色合いの上着はきっと合わなかったことだろう。

私は何故かわ変わらずに優しい手つきの彼の意図が読めなくて、ただ黙って縮こまった。

「あのね、僕、君が魔女だってこと、知ってたよ」

そうだろう。そうでなければこんな行動には出ない。

「だけど、君は根が優しい子で、どうしても妹を殺せないでいた事も、知っていたよ」

だから、何だっていうの。

「僕は　　そんな君が、とても愛しい」

そうやって、彼は私の首筋にキスをした。

私は固まった

　　というか、固まる以外にどう反応すればいい。

彼は私の頭を胸に抱きかかえ、髪に指を差しこんで穏やかに続けた。

「僕はね、君に一目惚れだったんだよ。神の許しなんてどうでもいいくらい、君が好きなんだ。家なんてどうでもいい。家族すらも煩わしい　　だけど、僕は未練たらしい男だから、最後の最後で迷って、いつだって行動が遅いから、君の手を取り遅れて、いつも後悔してた」

「は………?」

「だけど君は、そんな僕を好きでいてくれた。駄目な部分を嫌って憎んでも、結局全て許してくれた。愛してくれる君に安心して

　　同時に、昔の僕のように怖じ気づいた君が、不安だったよ」

「ま、待って！何の事　　」

「僕と君の、向こうでのことだよ」

シャツを驚掴んで彼に聞けば、彼は優しく、子供に教えるようにそう囁いた。

向こう

向こう?……向こう!??

「なん……なんで？何で、『覚えてる』の……？」

「だって、君が教えてくれたじゃないか。君が寝たフリをしていた僕を、『本当の名前』で呼んでくれたじゃないか」

「なッ　　騙してたの！？それで……分かってて、私に……っ」

す、と私の唇に人差し指を当てると、彼は「長い話になるけどいいかな？」と聞いてから、静かに口を開いた。

「僕だって最初は、君とは初対面だと『思ってた』。『ヘンゼル』って呼ばれてるのに何の疑問も抱かなかった。家に帰ってたかったし

　　だけど、君とは去り難かった」

「そう……」

「そして例のあの夜。グレーテルが閉じ込められてから、僕はそのぐちゃぐちゃになってるお祖母さんに頼みこんで、君に慰められたりしたね。……今思うと滑稽だ」

「……」

「君は好機とばかりに僕に寄り添ってくれたね。慰めて励まして甘やかして、あの手この手で僕を懐柔しようとしていた」

するり、と私の手を俗に言う恋人つなぎに変えると、彼は懐かしむように遠くを見た。

「『あの時まで』僕には妹が一番だったから、とても苛々してたな

あ。いつそ君をあてつけに捨ててしまうのも一興かもしれない、なんて思うぐらいにはね。僕は　　そう、最初は、愛というものは無かった…」

薄々分かってはいた事なのに、実際彼の口からそう言われると胸に剣が刺さったように苦しい。

思わず彼の手から滑り落ちそうになった手をしっかりと握り直すと、彼はふと思い出し笑いを浮かべて私を見つめた。

「　　だけど君ったら、本当に泣き虫な魔女なんだものなあ。僕が見てないと思って泣いたりぼんやりしてたり、食事もあり食べなくなるのなもの。何だか元気にさせたいとか色々思ってしまったよ」

「そ　　そう、だった…?」

「うん。これが二度目のしょっぱい恋だったね、今思うと………だと妹の事も心配で、僕はどうしようかと悩んでた時だった」

「私が、あなたの名前を…呼んだ」

「そう。僕はそれで走馬灯のように思い出したよ。君との出会い、君に恋して、父様と喧嘩したこと、君が去ってしまったこと。君とやっと、出会えたこと」

「じゃあ…なんで教えてくれなかったのよ……!」

だって、【お菓子の家の魔女】が【ヘンゼル】と呼ぶのだから。

「え　　」

「そもそも僕の名前も、盗み聞きみたいな形だから分からないけ

ど…所々抜けてる記憶がある。完璧とは言い難い…でも、それで良かったかもしれない」

「何故っ」

「そうしたら　君は、僕から離れない」

もう一度噛みつきこうとして彼の顔を見た瞬間、私は何だか怖いものに気押されて唇を噛んだ。

あの美しい、海よりもなお深い瞳が、…爛々として今にも獲物に齧り付きそうな獣に見えるなんて、嘘だ。私の目がきつとおかしいのよ。

「怖がらないで。…こう思うのも当然だろう？君は僕が無い勇気を振り絞って君の手を取ろうとしたら何処かに消えて、やっと出会うてもあと少しの所で君は逃げてしまっただ」

「私は　だって、私のせいで変な噂が…ッそれに、私は逃げて無い！」

「逃げたよ。結局、僕の手を取ってくれなかったじゃないか…結局僕は、結婚してしまった」

「それはあなたが」

「うん、まだ記憶があやふやだから少し違うかもね、でも事実そうだろう？僕は　君があの本を渡しに来た時、君と一緒に逃げる決意を固めてくれたものだと思ったのに。…ああいや、一緒に逃げてくれたのか。…ごめんね、こちらへんも少しあやふやなんだ」

「…こ…って、怒って、ないの？私、あなたを…あなた、…を…」

「ああ、泣かないで」

怒ってないよ、だって君は僕を選んできたんだから。

そう優しく囁いて、彼は私のおでこにキスをした。そして私と目を合わせてにこり、と照れ臭そう笑う。

「愛して、いるよ」

「…う…っ…」

「ごめんね、変な意地を張って。こんな思いをさせるぐらいなら、君にすぐにも告げるべきだった」

「うっん、…ありがとう…」

思わず涙がぶわつと溢れて、ぽたぽたと落ちる。

私はやっと、彼から欲しくてたまらなかつた言葉を『彼から』貰った。もうそれだけで私は、私の努力も犠牲も、全部が昇華された。溢れた感情のまま、私はそのまま彼にキスをして、へにやりと笑った。彼の優しい顔と声に、忘れていた。

「… あ？」

脇、腹が、…熱い？痛い？あれ、…あれ？

「そう、良かった。じゃあ気が変わらない内に、」

「待つ　　なん、これ、…え？」

「ごめんね。本当に…ごめん。僕だって君を傷つけたくない。痛い

思いだつてして欲しくないよ……だから、暴れないで」

「や……だっ！放して！放してえっ待ってよ　　誰か、ローラント、しらっ……雪！誰か……んんんっ」

「……ごめんね、あんまりそう叫ばれると、手元が狂うかも」

「……ッ、嘘つき！」

叫んで、震える手で足を庇おうとして、彼が手元の刃をチラつかせた。

私は、私は、怖くて、さっきまでどうでもいいなんて態度だったくせに、彼に優しくされて、浮かれて、両想いに喜んで、　　な
んて、残酷。

「僕はね、決めてたんだ。『今度こそ、自分に正直に生きると決めた時は』」

「やだ、やだ……やだ、あ、ああ」

「『君の手を放さない。酷いと罵られても構わない、絶対逃がさない』」

「いやあああああああああああああああ……！」

もうだいぶ暗くなったのが、きつと幸い。

私の足首、臍に目掛けて振り下ろしたナイフ。奇しくもそれは、彼の為にと私が拵えたナイフだった。外は野犬が出て危ないからと。外に出ると言う時はいつも、持たせてた。

私は叫んで、ただ叫んで、脇と横腹の痛みに上手く身体を庇えなくて。涙と涎と血を垂らしながら、恐る恐る彼を見上げた。彼はどんな顔をしているのだろう　　ああ、その顔は、

「『　　そうして僕は、僕を選んだ事を後悔させないぐらい、絶対に君を幸せにするんだ』……………ごめん、ね」

ないてるのに、わらってる。へんな、かお…………だ。

*

さあ、【グレーテル】の元へ急ごうか。

「え　あ…………さ、ま。にいさま、兄様あ！！助けに来てくれたのね！？信じてたわ！信じてたッ。ああ…………お兄様、早く此処から出して！！」

「……………久し振り、大丈夫？」

「…っ、うん、大丈夫だった。怖かった、怖かったよお…………お兄、」

「　　おにい、さま。それ、なに？」

「これ？包丁。ロゼはこれで君を殺そうとしたみたいだね」

「…ああ、じゃああの女をやったのね！？凄いわお兄様！」

「……痛いって、ずっと泣いてたよ。可哀想な事をした。痛み止めか何か、飲ませてからするべきだったかな……」

「そんなの不要よ！ああお兄様泣かないで、それは酷い事じゃないわ。必要な事だったのよ」

「そう、かな……目的の為に、人を傷つけることが？」

「ええ！お兄様は王子様だもの。王子様がお姫様を助けることの何処に悪い事が、……」

「良かった！じゃあコレも、君は許してくれるんだね！」

「…、…え」

「これも『お姫様』を助ける為なんだ。『魔女』を殺そうしたらね、僕の愛しい人が【粗筋通り】死ななきゃならない」

「……い、……い……！」

「おかしいな、さっき君は『王子様がお姫様を助ける行為』を肯定したじゃないか。そう責められる言われは、無い、よっ、と」

「い、ああああ！」

「ごめんね、すぐ終わらせる。君への罰はこれでお終い」

「…っ、っ、何…！？」

「僕からロゼを、遠ざけただろ」

「……、……」

「知っているよ。君は彼女との噂を流した張本人だよ。結婚式の日も僕らを監禁するように勧めた。…これは僕らの愛を邪魔する、君への罰だ」

「まって、わたし、…ごめんなさい……」

「うん、許してあげる。…おやすみ、エーデルシュタイン。僕のため一人の妹」

*

(「これで【物語】は……)」

15・二つだけ、決めていた。(後書き)

ロクな目に遭ってない、女の子二人のお話でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7319x/>

白雪姫と一緒

2011年12月10日00時55分発行